

小学校音楽科の表現領域「音楽づくり」が 活性化する指導に関する研究

ータブレットPCを補助的に活用しながらー

2018/3

四日市市教育委員会 教育支援課

はじめに

現在の子どもたちが社会に出る頃には、少子高齢化や、グローバル化、情報化がさらに進み、先を見通すことがますます難しい時代になることが予想されます。

予測できない未来に対応するためには、社会の変化に受け身で対処するのではなく、自身が身に付けた知識・技能や収集した情報、体験等を活用し、他者と協働しながら主体的に問題を解決していく資質・能力を育むことが大切です。これらの力を育成するために、新学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」を掲げ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を求めています。

本市においても、「学ぶこと」と「社会とのつながり」を意識した教育課程を実現し、「社会人になっても通用する問題解決能力」の養成を図ることを本市の教育ビジョンの中で第一の施策として掲げています。そして、平成25年4月に発行した「問題解決能力向上のための授業づくりガイドブック」を平成29年3月に改訂し、授業改善を進めてきました。これらのガイドブックでは、子どもの思考過程を「5つのプロセス」で表し、「四日市モデル」として示しました。この考え方を課題研究にも取り入れ、「四日市モデル」を活用した授業のあり方について研究を進めています。

本年度の課題研究では、小学校音楽科においてタブレットPCを補助的に活用することで、「音楽づくり」を活性化させる研究に取り組みました。また、中学校外国語科においてスキット作りを手がかりに英語での会話を活性化させるための研究を行いました。さらに、本市の課題である不登校に対して、不登校児童生徒への初期対応や校内体制のあり方について、調査・研究を進めて参りました。

その成果を調査研究報告書として、ここにまとめました。これらの研究成果が、学校・園の日々の教育実践に活用されることを期待します。

末尾になりましたが、本課の研究調査を進めるにあたって、御指導・御助言いただいた国立教育政策研究所初等中等教育研究部総括研究官の山森 光陽様をはじめとして、研究協力員並びに調査・実践面で御協力いただきました学校等の関係者の皆様に心から感謝の意を表します。

平成30年3月

四日市市教育委員会教育支援課
課長 川邊 雅史

— 目 次 —

1 問題	1
2 目的	7
3 方法	7
4 結果	18
5 考察	23
[引用文献]	28
[資料]	29

小学校音楽科の表現領域「音楽づくり」が活性化する指導に関する研究 —タブレットPCを補助的に活用しながら—

1 問題

1.1 「音楽づくり」における現状

1.1.1 「音楽づくり」が教師にとって指導が難しい理由

小学校音楽科の表現領域は、「歌唱」「器楽」「音楽づくり」の3分野で構成されている。その1分野である「音楽づくり」について、現行小学校学習指導要領解説音楽編には、「児童が自らの感性や創造性を働かせながら自分にとって価値のある音や音楽をつくる活動」とある。この「音楽づくり」について、平成26年11月、国立教育政策研究所は、「教師の多くが『音楽づくり』の授業を経験していないことや、具体的な指導法や活動における子供の姿をイメージしにくいことなどから、教師にとって指導が難しい内容となっており、音楽づくりの授業が必ずしも効果的に行われていない状況が散見される」とし、「音楽づくり」の授業が効果的に展開されるように、映像指導資料「楽しく実践できる音楽づくり授業ガイド」を作成している。

また、Figure 1の川崎市音楽科研究会による市内の音楽指導を行っている小中学校教員へのアンケート結果では、『音楽づくり』『創作』の授業について効果的な進め方がなかなか思いつかない」と答えた教員は、86.4%に上った（毛利・青柳・伊藤・三浦，2014）。

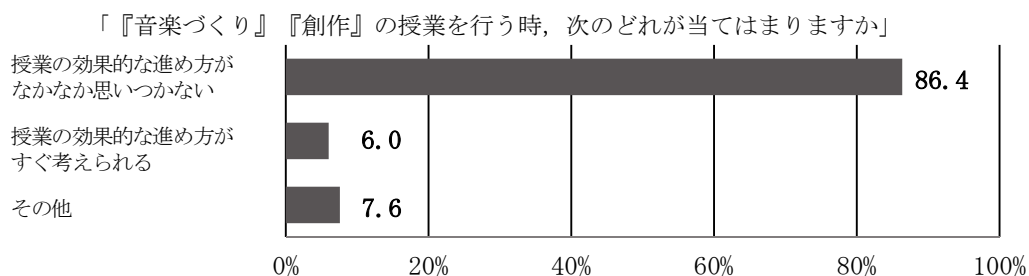


Figure 1 「音楽づくり」「創作」の指導について（毛利・青柳・伊藤・三浦，2014）

福岡市教育センター音楽科研究室（古賀・浦西・橋口・前田）は、福岡市内の小学校の教師と児童を対象に音楽の授業や「音楽づくり」の現状についての調査を行った。調査結果より、古賀・浦西・橋口・前田（2014）らは、「音楽づくりの学習が充実していないと回答している教師が多数を占める状況にあること」「音楽の学習において、教師は楽しく活動させることへの意識は高いが、児童相互が交流したり聴き合ったりしながら創意工夫する活動は、十分ではないと思われること」「音楽の授業において、児童は技能面に困難さを感じている傾向が見られること」が明らかになったとしている。この背景には、「教師が音楽づくりの学習をどのように進めてよいかわからないために取り組むことができなかつたり、児童に思いや意図をもたせる手段を講じずに学習指導を進めたりしている実態があるのではないか」としている。

さらに、今村・酒井（2012）は、「すべての学校で音楽づくりの授業が行われているとは言えない

状況」の理由として、「授業の進め方がよくわからない」「音楽づくりは時間がかかりそうだ」と指摘している。現行小学校学習指導要領解説音楽編には、「今回の『音楽づくり』には、既存の作品を創意工夫して表現する活動は含めておらず、歌唱及び器楽の活動において指導することに留意する必要がある」としている。この点も音楽をつくることに対し、より授業のイメージをもちにくく、一層難しさを感じる要因の一つと言える。

これらの調査結果や文献より、「『音楽づくり』が効果的に行われていない理由」として、以下の理由が考えられる。すなわち、「教師が『音楽づくり』の学習の進め方、指導方法についてのイメージを明確にもちにくいこと」「児童に思いや意図をもたせる手段の不足」「指導時間の不足」が考えられる。

1.1.2 「音楽づくり」に関する児童の捉え

上述のことに関連して、四日市市内の小学校6年生3クラス(91名)へ音楽の授業アンケートを行った。Figure 2の「音楽の授業は楽しいですか」という問いに「楽しい」「やや楽しい」と答えた児童は86%である。歌うことについては84%、リコーダー演奏については82%、鑑賞については78%が、「楽しい」「やや楽しい」と回答している。しかし、Figure 3の「音楽づくりの活動は楽しいですか」の問いになると、「楽しい」「やや楽しい」と感じる児童は、54%に留まっている。

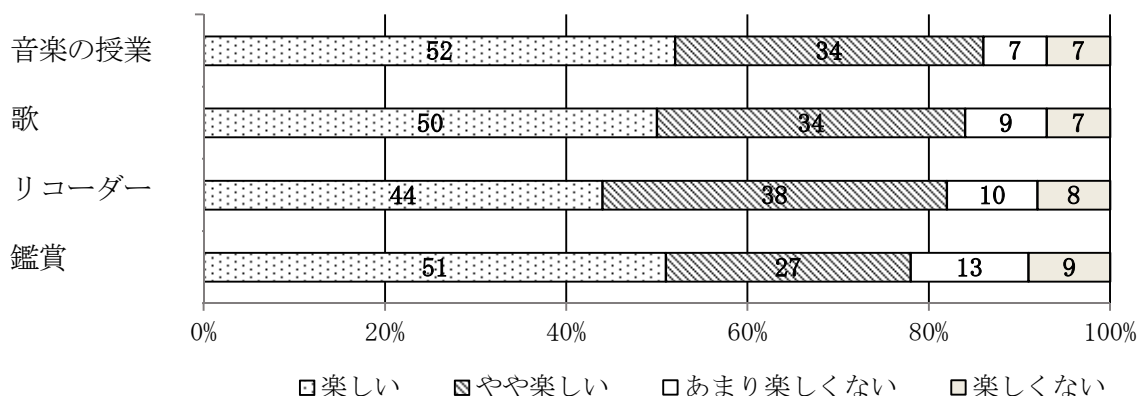


Figure 2 音楽の授業に関するアンケート(音楽の授業・歌・リコーダー演奏・鑑賞)

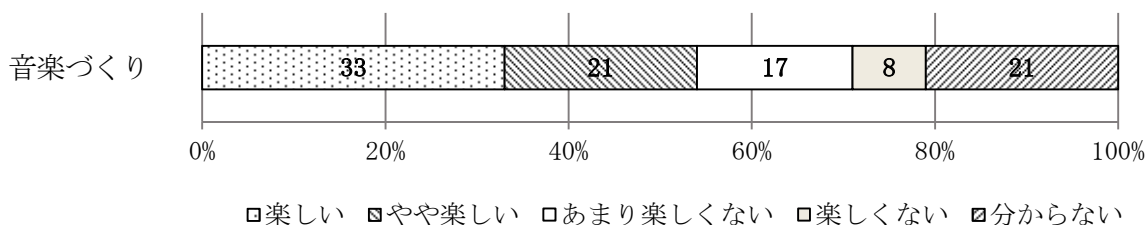


Figure 3 「音楽づくりの活動は楽しいですか」

注) 「音楽づくり」については、経験が少なく、楽しいか楽しくないか分からないという回答も考えられたため、「分からない」という項目を設けた。

「音楽づくり」に、「楽しい」「やや楽しい」と回答した児童は、自由記述に「みんなが考えたメロディーで演奏するリコーダーリレーがすごいと思う」「みんなの音楽を参考にできるのがよい」「楽

譜は読めないけれど、音楽をつくるのは好き」と書いた。

一方、「音楽づくり」に、「あまり楽しくない」「楽しくない」を選んだ児童は23名であり、その理由についての回答状況は、Table 1 の通りである。「楽譜への苦手意識」「音楽づくりをどのようにするのか見通しがもてない」「歌唱・楽器演奏への苦手意識」が挙げられている。このことから、「音楽づくり」が児童にとって難しさを感じる主な理由は、「基本的な知識・技能の定着との密接な関係（既習事項の習熟の課題）」「『音楽づくり』への見通しのもちにくさ」が考えられる。

Table 1 「音楽づくり」の活動に、「あまり楽しくない」「楽しくない」を選んだ理由（選択）

理由	人数 (n=23, 複数回答)
楽譜を書くことが苦手	17
楽譜を読むことが苦手	16
どのようにすればよいのか分からない	16
楽器を演奏することが苦手	9
歌を歌うことが苦手	6

1.1.3 「音楽づくり」の活性化

先に挙げたように、「音楽づくり」に、難しさを感じる教師は多い。また、歌唱・器楽の活動と比べて、「音楽づくり」を楽しんでいる児童の数も少ない。現行小学校学習指導要領解説音楽編にて、「創作活動は、音楽をつくる楽しさを体験させる観点から、小学校では『音楽づくり』、中・高等学校では、『創作』として示すようにする」とされている。「音楽をつくる楽しさを体験」させる活動となるよう、「音楽づくり」を活性化させる必要がある。

本研究では、「音楽づくり」の活性化について、以下のように定義する。定義については、「評価基準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料（小学校音楽）国立教育政策研究所（2013）」の「『A 表現・音楽づくり』の評価基準に盛り込むべき事項（第5学年及び第6学年）」（Table 2）を参考にした。なお、表中の下線が以下の定義と関連する箇所である。

a) 意欲的に「音楽づくり」に取り組もうとする児童の増加

これは、Table 2 の「音楽への関心・意欲・態度」の「『音楽づくり』の評価基準に盛り込むべき事項」の「音楽をつくったりする学習に主体的に取り組もうとしている」に相当する。

b) 工夫し、見通しをもって「音楽づくり」に取り組む児童の増加

これは、Table 2 の「音楽表現の創意工夫」の「音を音楽に構成していくことを工夫し、どのように音楽をつくるかについて見通しをもっている」に相当する。

c) 音を音楽に構成し、演奏する技能の高まった児童の増加

これは、Table 2 の「音楽表現の技能」の「基礎的な技能を身に付けて、音を音楽に構成したりしている」に相当する。また、Table 3 の「音楽表現の技能」の「正確なリズムで演奏することが

できる」,Table 4・5の「音楽表現の技能」の「聴き手を意識して、正確に演奏することができる」に相当する。

Table 2 「A 表現・音楽づくり」の評価規準に盛り込むべき事項（第5学年及び第6学年）

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
いろいろな音楽表現、音楽の仕組みに興味・関心をもち、即興的に表現したり、音楽をつくったりする学習に主体的に取り組もうとしている。	音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取りながら、即興的な表現や音を音楽に構成していくことを工夫し、どのように音楽をつくるかについて見通しをもっている。	いろいろな音楽表現を生かしたり、音楽の仕組みを生かしたりするなどの基礎的な技能を身に付けて、即興的に表現したり、音を音楽に構成したりしている。

Table 3 「リズムをつくってアンサンブル」の評価規準

題材の評価規準		
音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
リズムの特徴に興味・関心をもち、既習のリズムを組み合わせて、1小節のリズムをつくり、仲間とリズムアンサンブルをする学習に主体的に取り組もうとしている。	既習のリズムを組み合わせて、1小節のリズムをつくり、仲間とリズムアンサンブルをするについて、見通しをもっている。	既習のリズムを基に、1小節のリズムをつくり、そのリズムを正確に刻んでいる。仲間と合わせて、リズムアンサンブルをする際、正確なリズムで演奏することができる。

Table 4 「和音の音で旋律づくり 課題①『和音にふくまれる音を使って4小節の旋律をつくろう』」の評価規準

題材の評価規準		
音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
和音の響きや移り変わりに興味・関心をもち、和音に含まれる音や既習のリズムを使って旋律をつくり、まとまりのある旋律に仕上げる学習に主体的に取り組もうとしている。	和音やその移り変わりを聴き取り、その働きが生み出す響きのよさを感じ取りながら、和音に含まれる音や既習のリズムを使って旋律をつくり、まとまりのある旋律に仕上げるについて、見通しをもっている。	和音に含まれる音や既習のリズムを基に旋律をつくったり、自分なりのまとまりのある旋律をつくったりしている。聴き手を意識して、正確に演奏することができる。

Table 5 「和音の音で旋律づくり 課題②『和音にふくまれる音を使って、小学校生活の思い出ソングをつくろう』(8小節)」の評価規準

題材の評価規準		
音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
和音の響きや移り変わりに興味・関心をもち、和音に含まれる音や既習のリズムを使って旋律をつくり、歌詞と旋律の組み合わせを意識して、まとまりのある旋律に仕上げる学習に主体的に取り組もうとしている。	和音やその移り変わりを聴き取り、その働きが生み出す響きのよさを感じ取りながら、和音に含まれる音や既習のリズムを使って旋律をつくり、歌詞と旋律の組み合わせを意識して、まとまりのある旋律に仕上げるについて、見通しをもっている。	和音に含まれる音や既習のリズムを基に旋律をつくったり、歌詞と旋律の組み合わせを意識して、まとまりのある旋律をつくったりしている。聴き手を意識して、正確に演奏することができる。

1.2 「音楽づくり」が活性化する先行研究

1.2.1 常時活動

「音楽づくり」を活性化させるために限られた時間の中で、「音楽づくり」に関わる既習事項の習熟を高めることが必要である。中島・高倉・平野（2016）は、日本の音楽科教育の問題点として、『歌唱』『器楽』の授業の偏重（『音楽づくり』『鑑賞』の授業の充実が課題）『音楽づくり』『鑑賞』もやりたいが、時数その他の理由で、なかなか理想的にはいかないという問題（苦悩している教師の姿・理想と現実のギャップ）」を挙げている。ここでいう「理想」とは、音楽づくりも鑑賞も適切な時間配分で指導することができている状態としている。しかし、現実的には、時間が十分ではない、「音楽づくり」や鑑賞の授業をどのように構築したら良いのか自信がもてないでいる教師が多いと指摘する。そして、「理想」の姿を求めるために、「常時活動」の重要性を挙げている。「常時活動をキーワードにして、授業に取り組むことで『問題の解決の糸口が見えてくる』『音楽科の授業を通して、どんな子どもを育てたいのかがさらに明らかになってくる』」としている。

常時活動とは、中島他（2016）が、「最低限、授業の始まりの10分くらいを3人共通に取り組む時間をつくろう」ということで始めた活動である。常時活動の効果として、平野（2016）は、「毎時間少しずつ、いろいろな音楽的な技能、感覚を育てていくことができる」と述べている。「3年にわたった本研究によって明らかになったことの1つに『常時活動』の重要性がある。毎時間積み上げていくこと、例えば、歌のレパートリーを増やすこと、リズムゲームをすること、楽典などの知識を学ぶこと、これら常時活動で取り上げている内容は、実は系統的に扱われていること、あるいは扱うべきであることが明らかになった」としている。「常時活動を通して系統的に音楽づくりや鑑賞の学習を積み上げることが、今音楽科が抱えている問題を解決するに益するのではないか」と常時活動の重要性を指摘した。系統的に常時活動を行うことで、「児童に思いや意図をもたせる手段の不足」を補うとともに、教師が「音楽づくり」の学習の進め方、指導方法についてのイメージを持ちやすくなることが考えられる。

1.2.2 タブレットPCの補助的活用

1.2.2.1 タブレットPCの特徴

タブレットPCとは、液晶ディスプレイの持ち運びを可能にした薄型のペン入力式携帯コンピュータのことである。音楽作成ソフトをインストールすることにより、音楽再生時において楽譜を見ながら音を聴くことができる。

1.2.2.2 タブレットPCを用いることで示された効果

鹿児島音楽教育ICT研究グループ（2014）は、合唱指導において音楽作成ソフトを活用した。音楽作成ソフトの特徴を「音の進行とともに音符の色が変化するため、楽譜のどの部分を歌っているのか、読譜に苦手意識を有している子どもにも分かりやすい」「音程やリズムの上下が視覚的に分かりやすいため、読譜の学習につながる」としている。『音の視覚化』ができ、効果的な音取りが可能」に

なると述べている。

渡辺（2016）は、題材「モチーフを変化させて旋律をつくろう」において、中学2年生に、4分の4拍子1小節のモチーフを創作し、それらをつなげて展開させることによって、8小節～16小節の単旋律を創作させた。タブレット型端末・楽譜作成アプリの再生・保存の機能を十分に生かして個人の旋律創作と意見交流活動を展開することにより、「音楽のよさやおもしろさに気づかせ、音や音楽の世界を広げることができた」と述べている。

山崎（2012）は、5年生の単元「いろいろなひびきを味わおう」教材曲「りぼんのおどり」にて、タブレットPCを導入した。音の重なり、楽器の音色の選択を工夫し音楽をつくる活動において、タブレットPCを使い学習方法の効果を検証した。曲の7つのパートのそれぞれについて実際に教師が演奏し、録音したものを用意した。児童が、自分たちの演奏をシミュレーションするには、パートの音を選択し、フレーズごとに演奏しないパートを削除させた。「合わせる活動や技能を習得していなくても音・音楽を聴きながら学習者の思いや意図に即した音楽をつくることができる」「何度も修正することができるため試行錯誤しながら音楽をつくることができる」効果があったとしている。

彌永・吉田（2015）は、6年生の単元「和音の美しさを味わおう」の「和音伴奏に合う歌いやすい旋律を考えて学級歌をつくろう」という課題に対して、タブレットPCを用いて学級歌をつくる活動を行った。音楽科の授業における児童の意識調査の結果を実践前後で比較し、意識の変容を分析した。

『ふだんの生活の中で音楽をつくることは好きである』『音楽をつくる活動のとき、自分のイメージや思い、場面や様子などを音や音楽で表すことは好きである』の項目において上昇が見られた」と述べている。

1.3 「音楽づくり」を活性化させる取組

これまで述べてきたように、「音楽づくり」について課題を感じる教師や苦手意識をもつ児童が多い。主な理由として、教師にとっては、『音楽づくり』の学習の進め方、指導方法についてのイメージを明確にもちにくいこと「児童に思いや意図をもたせる手段の不足」「時間の不足」が挙げられる。児童にとっては、「基本的な知識・技能の定着との密接な関係（既習事項の習熟の課題）」「音楽づくり」への見通しのもちにくさ」が考えられる。教師にとって「音楽づくり」をするうえで必要な既習事項の習熟を図ることにより、「音楽づくり」がイメージしやすいものとなると期待できる。児童にとっては、「音楽づくり」の見通しがもてることで、「音楽づくり」が活性化すると考える。また、タブレットPCを「和音伴奏の再生機」「リズムづくりの補助的機能」として活用することで、児童が、「和音を意識しながら旋律づくりをする」「リズムを工夫しながら旋律づくりをする」ことに有効だと考える。したがって、常時活動とタブレットPCの補助的活用によって「音楽づくり」が活性化されると考える。

2 目的

以上の問題を踏まえ、本研究の目的は、常時活動（リズム遊び、リコーダーリレー¹）、タブレット PC の補助的活用が、「音楽づくり」を活性化させることに有効であることを検証する。

常時活動では、「音楽づくり」の土台となる既習事項（器楽・リズム・楽譜の理解）の習熟を図る。児童に何の手立てもなく、「旋律をつくりましょう」と投げかけたとする。児童は、何をすればよいのか分からない。常時活動にて、既習事項の習熟を図ることで、「音楽づくり」の際、既習事項を拠り所とし、見通しをもって取り組むことができる。これは、教師にとっての「音楽づくり」の難しさの要因の一つである、「児童に思いや意図をもたせる手段の不足」を補うことにもなる。そして、既習事項を基にした「音楽づくり」を考えていくことは、教師がより「音楽づくり」をイメージしやすくなる と考える。

タブレット PC は、音の視覚化ができることから、「和音伴奏の再生機」「リズムづくりの補助的機能」として活用する。「和音伴奏の再生機」としては、伴奏をタブレット PC が担うことで、伴奏する際の演奏技能に左右されることなく、和音を意識しながら旋律づくりに専念できる。

「リズムづくりの補助的機能」としては、リズムを視覚的に確認し、使うことができる。そのため、旋律づくりの際に、読譜への苦手意識がある児童も、タブレット PC がリズムを再生することにより、リズムを工夫しながら旋律づくりをすることに有効だと考える。

仮説を検証するために、「音楽への関心・意欲・態度」「音楽表現の創意工夫」「音楽表現の技能」における観点の評価の変化、「音楽づくり」の活性化に関する事前・事後意識調査の結果の変化、タブレット PC の活用状況から、「音楽づくり」の活性化が実現できるかを明らかにする。

3 方法

3.1 調査対象

四日市市内の小学校 6 年生 3 クラスを調査対象とし、平成 29 年 6 月から 11 月にかけて調査を行った。常時活動は、研修員・研究協力員が行い、検証授業・記録・分析は研修員が行った。

3.2 データの収集と分析

3.2.1 活性化された姿に相当すると考えられる「音楽への関心・意欲・態度」「音楽表現の創意工夫」「音楽表現の技能」の観点の評価

「評価基準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料（小学校音楽）国立教育政策研究所（2013）」には、現行小学校学習指導要領を踏まえ、「音楽科の特性に応じた評価の観点及びその趣旨（Table 6）」「第 5 学年及び第 6 学年の評価の観点の趣旨（Table 7）」『A 表現・音楽づくり』の評価基準に盛り込むべき事項（第 5 学年及び第 6 学年）（Table 2）」が示されている。「観点別学習状況の評価基準と判定基準（2011）」には、観点別評価の考え方と手順、音楽科の観点と評価の実際、各学年の評価

¹ リコーダーリレーとは、リコーダーで、1小節～2小節単位で旋律を演奏し、リレーのようにつなげて演奏する活動である。

規準と評価基準が書かれている。これらを参考に、評価規準・基準を作成した。

また、児童の使用する教科書の指導書「小学生の音楽6 研究編（教育芸術社）（2015）」にある、「リズムをつくってアンサンブル」「和音の音で旋律づくり」に関する評価規準についても参考とした。以上から児童の実態、単元の特性を鑑みながら、研修員が研究協力員と協議し、評価規準を作成した（Table 3, Table 4, Table 5）。

Table 6 音楽科の特性に応じた評価の観点及びその趣旨（小学校音楽）

音楽への 関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能	鑑賞の能力
音楽に親しみ、音や音楽に対する関心を持ち、音楽表現や鑑賞の学習に自ら取り組もうとする。	音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取りながら、音楽表現を工夫し、どのように表すかについて思いや意図をもっている。	音楽表現をするための基礎的な技能を身に付け、歌ったり、楽器を演奏したり、音楽をつくったりしている。	音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取りながら、楽曲の特徴や演奏のよさなどを考え、味わって聴いている。

Table 7 第5学年及び第6学年の評価の観点の趣旨（小学校音楽）

音楽への 関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能	鑑賞の能力
創造的に音楽にかかわり、音や音楽に対する関心を持ち、音楽表現や鑑賞の学習に自ら取り組もうとしている。	音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取りながら、音楽表現を工夫し、どのように表すかについて思いや意図をもっている。	音楽表現をするための基礎的な技能を高め、歌ったり、楽器を演奏したり、音楽をつくったりしている。	音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取りながら、楽曲の特徴や演奏のよさを理解し、味わって聴いている。

評価基準については、「観点別学習状況の評価規準と判定基準（2011）」を参考にし、Figure 4にあるように評価基準の設定を行い、Table 8にまとめた。

評価基準は、Table 8に示すように、3観点で評価する。A,B,Cの3段階で評価する。教科書教材である「リズムをつくってアンサンブル」「和音の音で旋律づくり」の観点の評価の変化から、「音楽づくり」の活性化について考察した。

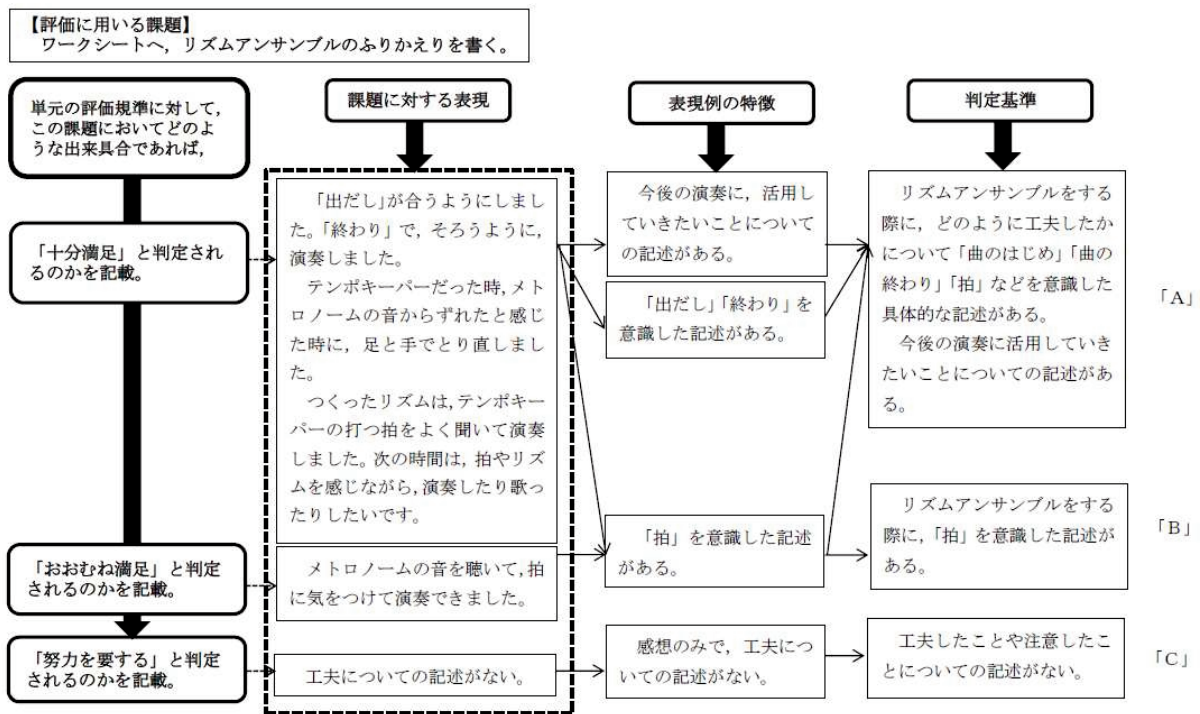


Figure 4 評価基準の設定 リズムをつくってアンサンブル（音楽表現の創意工夫）ワークシートの記述より

Table 8 「リズムをつくってアンサンブル」「和音の音で旋律づくり」の評価基準

	単元名	A	B	C
音楽への関心・意欲・態度	リズムをつくってアンサンブル	与えられた時間に十分活動して、組み合わせを変えながら、リズムをつくっている。 つくったリズムを練習している。	リズムカードを用いて、リズムをつくっている。 つくったリズムを練習している。	リズムをつくり練習する活動が滞っている。
	和音の音で旋律づくり 課題①「和音にふくまれる音を使って4小節の旋律をつくらう」	与えられた時間に十分活動して、伴奏に合うように、何度も音の響きを確かめながら、旋律づくりに取り組んでいる。	和音から音を選び、音の響きを確かめながら、旋律をつくっている。	旋律づくりの活動が滞っている。
	和音の音で旋律づくり 課題②「和音にふくまれる音を使って、小学校生活の思い出ソングをつくらう」（8小節）	与えられた時間に十分活動して、歌づくりに取り組んでいる。 伴奏に合うように、何度も音の響きを確かめながら、歌づくりに積極的に取り組んでいる。	音の響きを確かめながら歌づくりに取り組んでいる。	歌づくりの活動が滞っている。

	単元名	A	B	C
音楽表現の創意工夫	リズムをつくってアンサンブル	<p>【行動観察】 「曲のはじめ」「曲の終わり」「拍」などの視点で発言し、仲間と意見交流をしながら練習している。</p> <p>【ワークシート】 リズムアンサンブルをする際に、どのように工夫したかについて「曲のはじめ」「曲の終わり」「拍」などを意識した具体的な記述がある。今後の演奏に活用していきたいことについての記述がある。</p>	<p>【行動観察】 「拍」という視点で発言し、練習している。</p> <p>【ワークシート】 リズムアンサンブルをする際に、「拍」を意識した記述がある。</p>	<p>【行動観察】 視点をもって練習しようとする姿が見られない。</p> <p>【ワークシート】 工夫したことや注意したことについての記述がない。</p>
	和音の音で旋律づくり 課題①「和音にふくまれる音を使って4小節の旋律をつくろう」	<p>【行動観察】 様々な要素について考慮しながら、旋律づくりに取り組んでいる。</p> <p>【ワークシート】 「音の高さ」「旋律の『続く感じ』『終わる感じ』『リズム』といった言葉を用いて、旋律づくりの工夫についての具体的な記述が多くある。</p>	<p>【行動観察】 一定の指示を踏まえながら旋律づくりに取り組んでいる。</p> <p>【ワークシート】 旋律づくりの工夫についての記述がある。</p>	<p>【行動観察】 旋律づくりに工夫が見られない。</p> <p>【ワークシート】 旋律づくりの工夫についての記述がない。</p>
	和音の音で旋律づくり 課題②「和音にふくまれる音を使って、小学校生活の思い出ソングをつくろう」(8小節)	<p>【行動観察】 グループ内で、「音の並びやリズム」「続く感じ」「終わる感じ」「言葉と旋律の関連」「歌いやすさ」などを意識しながら歌づくりをしている。 歌づくりの工夫が十分できている。</p> <p>【ワークシート】 「歌いやすさ」「言葉と旋律の関連」「1小節に入れる文字数」など、歌づくりの際に工夫したことについての具体的な記述がある。</p>	<p>【行動観察】 「音の高さ」「リズム」を変更して歌づくりをしようとしている。</p> <p>【ワークシート】 歌づくりの際に工夫したことについての記述がある。</p>	<p>【行動観察】 歌づくりの工夫ができていない。</p> <p>【ワークシート】 歌づくりの際に工夫したことについての記述がない。</p>

	単元名	A	B	C
音楽表現の技能	リズムをつくってアンサンブル	自分のつくったリズムを「拍」に合わせ、「曲のはじめ」「曲の終わり」などを意識しながら、リズムを正確に演奏することができる。	自分のつくったリズムを正確に演奏している。演奏する中で時折、リズムの乱れがある。	つくったリズムを正確に演奏することができない。
	和音の音で旋律づくり 課題①「和音にふくまれる音を使って4小節の旋律をつくろう」	音の並びやリズムを工夫し、自分なりのまとまりのある旋律をつくっている。 聴き手を意識して、正確に演奏することができる。	リズムを工夫し、自分なりのまとまりのある旋律をつくっている。 聴き手を意識して、演奏することができる。	リズムの工夫や旋律づくりが滞っている。 聴き手を意識して、演奏することができない。
	和音の音で旋律づくり 課題②「和音にふくまれる音を使って、小学校生活の思い出ソングをつくろう」(8小節)	和音にふくまれる音や既習のリズムを基に、「言葉と旋律の関係」など、歌詞を意識しながら、歌いやすい歌づくりをすることができる。 聴き手を意識して、正確に演奏することができる。	「言葉とリズム」を意識して、歌づくりをすることができる。 聴き手を意識して、演奏することができる。	歌づくりの活動ができない。 聴き手を意識して、演奏することができない。

3.2.2 「音楽づくり」の活性化に関する事前・事後意識調査【資料1・2】

意識調査の項目・回答選択肢については、以下に示す通りである。事前調査は6月、事後調査は11月に実施した。

- a) 「意欲的に『音楽づくり』に取り組もうとする児童の増加」に関する項目・回答選択肢については、Table 9の通りである。
- b) 「工夫し、見通しをもって『音楽づくり』に取り組む児童の増加」に関する項目・回答選択肢については、Table 10の通りである。

Table 9 「意欲的に『音楽づくり』に取り組もうとする児童の増加」に関する項目・回答選択肢

項目	回答選択肢
音楽の授業は楽しいですか	楽しい・やや楽しい・あまり楽しくない・楽しくない
音楽づくりの活動は楽しいですか	楽しい・やや楽しい・あまり楽しくない・楽しくない・分からない
音楽づくりの活動の時、友達と一緒に活動することを楽しんでいますか	楽しい・やや楽しい・あまり楽しくない・楽しくない・分からない
音楽(簡単なせんりつ【メロディー】)をつくってみたいと思いますか	思う・どちらかといえば思う・どちらかといえば思わない・思わない
音楽づくりの活動の時、自分のイメージや思いを演奏や楽譜で表すことは好きですか	好き・どちらかといえば好き・どちらかといえばきらい・きらい・分からない

Table 10 「工夫し、見通しをもって『音楽づくり』に取り組む児童の増加」に関する項目・回答選択肢

項目	回答選択肢
音楽づくりの活動では、音楽の授業で学んだことを生かして取り組んでいますか	生かしている・どちらかといえば生かしている・どちらかといえば生かしていない・生かしていない
音楽づくりの活動の時、何度も音で確かめながら取り組んでいますか	取り組んでいる・取り組んでいない・分からない
音楽の授業の中で、グループで活動する時、友達の意見や考えは参考になりますか	参考になる・どちらかといえば参考になる・どちらかといえば参考にならない・参考にならない

3.2.3 タブレットPCの活用状況

タブレットPCは、「和音の音で旋律づくり」で活用した。「和音伴奏の再生機」しての活用回数と、「リズムづくりの補助的機能」としての活用回数を計測した。読譜が得意な児童、不得意な児童に分けて活用回数を分析した。

3.3 「音楽づくり」の活動を活性化させるための手立て

3.3.1 常時活動

3.3.1.1 リズム遊び

Figure 5 にある様々なリズムパターン譜を提示した。教師は、クラベスや電子メトロノームで拍を提示した。

児童は、リズムパターン譜を読んで、拍に合わせて手拍子をした。一度に全てのリズムを扱うのではなく、段階的に扱うリズムを増やし、音符やリズムに対する理解を図った。既習事項として演奏できるリズムを増やしていくことで、「リズムアンサンブル」にて、リズム

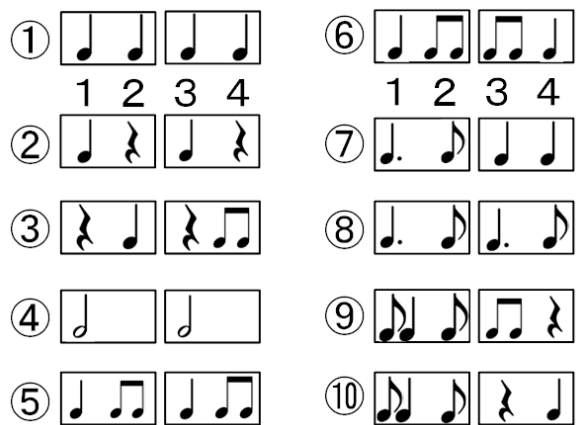


Figure 5 リズムパターン譜

をつくる際に、既習のリズムを組み合わせればよいことに気づくことにより、見通しをもちやすくなると考えた。さらに、「和音の音で旋律づくり」においても、旋律のリズムを変更する際にも有効に働くと考えた。

3.3.1.2 「リコーダーリレー」(「ソ」「ラ」「シ」の音を使って、1~2小節を即興的に演奏する)

平野 (2016) は、常時活動に、鍵盤ハーモニカやリコーダーを使って、音遊びやアドリブ (即興演奏) を取り入れている。「3つの音でのアドリブ」の紹介の中で、「音が『上がる』『下がる』や『終わった感じ』を考えさせたり、意識させたりすることで旋律づくりの活動につなげていくことができる」「アドリブの活動を充実させておけば、無理なく旋律づくりの活動に進むことができる」と「音楽づくり」における即興演奏の意義を述べている。

研究協力校の6年生はリコーダーリレーを4年生の時から実施しており、この学習活動が好きな児童が多かった。しかし、演奏やアドリブが苦手なことから、リコーダーリレーが苦手な児童や、「毎回

1 音のみしか使用しない」「全音符のみしか使用しない」という児童の姿もあった。そのため、「リズム遊びで使ったリズムをリコーダーレーで入れてみよう」「2つ以上の音を使ってみよう」といった声かけを行った。「まねっこリレー（前の人の旋律を同じように演奏する）」「しりとりリレー（前の人の旋律の最後の音から、次の旋律をつくる）」など、バリエーションを加えながら、即興での旋律づくりをさせた。また、旋律を「終わる感じ（『ソ』の音で終わる）でつくろう」「続く感じ（『ラ』『シ』の音で終わる）で終わって、隣の仲間に旋律をバトンタッチしよう」といった声かけをし、旋律づくりの活動につなげていった。

3.3.2 タブレット PC の補助的活用方法

3.3.2.1 音楽作成ソフトへの音符入力

本研究では、四日市市の小学校に配備されているタブレット PC に導入されている音楽作成ソフト（シンガーソングライターJ）を用いた。音楽作成ソフトには、「音符の入力」「音楽の再生」といった機能がある。音楽作成ソフトの課題として山崎（2012）は「児童が操作になれる必要がある」と指摘している。

本研究においては、音符入力や編集の習熟に時間を費やすより、歌唱・器楽・音楽づくりの活動に時間をかけたいという考えから、児童による音符入力は行わないこととした。児童の行う操作は、「再生」「停止」「選択」に限定した。

3.3.2.2 和音伴奏の再生機としての活用

まず、教育芸術社の「小学生の音楽 6」の 26 ページに掲載されている「和音の音で旋律づくり」では、課題①「和音にふくまれる音を使って 4 小節の旋律をつくろう」を行った。これに加え、発展として課題②「和音にふくまれる音を使って、小学校生活の思い出ソングをつくろう（8 小節）」を設定した。

教科書では、和音伴奏を児童が演奏することが提示されている。伴奏をする段階で児童の演奏技能によっては、演奏すること自体が難しくなり、旋律づくりまで活動が進まないことが考えられた。そこで、タブレット PC を、和音伴奏の再生機として利用した。教師が予め、教科書に提示されている伴奏を音楽作成ソフトへ入力しておいた（Figure 6）。

3～4 人のグループに 1 台、伴奏

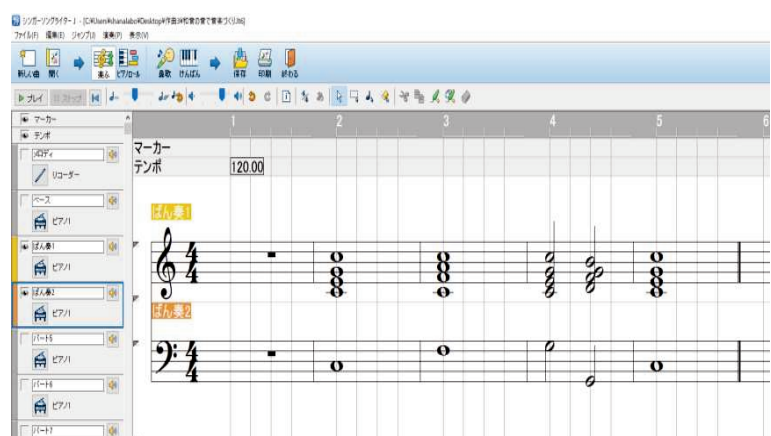


Figure 6 音楽作成ソフトの画面（教科書に掲載されている和音伴奏が入力されている）

注）1 小節目は、テンポの提示でカウントを入れるため、空白小節となっている。

譜が入力されたタブレット PC を渡した。児童は、リコーダーや鍵盤ハーモニカで 1 人 4 小節の旋律づくりをした。児童が、自分の考えた旋律を演奏する際、伴奏をタブレット PC が担うことにより、和音との響きを確認しながら、旋律づくりに専念できることをねらった。グループ内で、旋律を聴き合う際もタブレット PC を和音伴奏再生機として使用することで、和音を演奏する必要がなくなり、仲間のつくった旋律に集中して聴くことを期待した。

3.3.2.3 リズムづくりの補助的機能としての活用

課題①②の活動において、タブレット PC をリズムづくりの補助的機能としても活用した。リズムの学習は、常時活動及び、1 学期のリズムアンサンブルの授業にて行っていた。しかし、旋律づくりの際に、「このリズムはどのように演奏するのか」といった点で難しさを感じる児童もいると考えた。そこで、教師が音楽作成ソフトに、既習のリズムを予め入力しておい

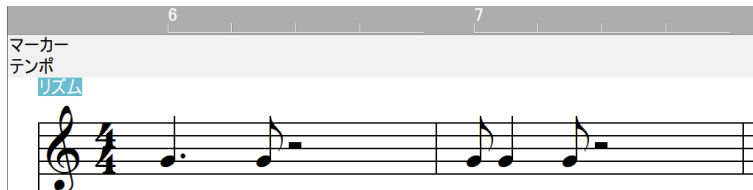


Figure 7 音楽作成ソフトの画面（リズム）

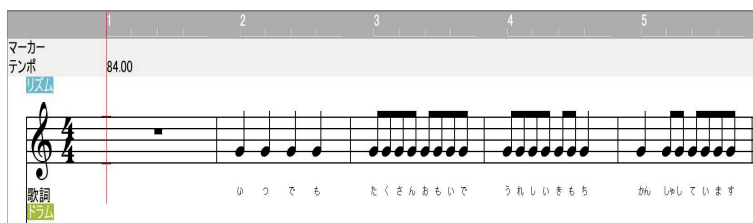


Figure 8 音楽作成ソフトの画面（歌詞・リズム）

た(Figure 7)。旋律づくりにおいてリズムが分からなくても音楽作成ソフトに入力されたリズムを再生することで、楽譜を見て、音で確認することができると考えた。

つくった旋律を歌詞に合うように、リズムを変える活動では、「この歌詞に合うリズムは何か」と戸惑うことも考えられた。そこで、教師が音楽作成ソフトに既習のリズムパターンに合わせて、そのリズムに合う仮の言葉を入力しておいた。これにより、音符と言葉を一体として捉えやすくなり、言葉とリズムを関連させる活動が停滞せずに、取り組むことを期待した (Figure 8)。

3.3.3 「音楽づくり」を活性化する授業のあり方

3.3.3.1 リズムアンサンブル【資料3】

各学年のカリキュラムに、「音楽づくり」の領域であるリズム活動が配当されている。6 年生では、7 月教材（教育芸術社）として、「リズムをつくってアンサンブル（単元）」がある。課題は、「打楽器の音色や音楽のしくみを生かして、リズムアンサンブルをつくりましょう」と設定されている。教科書には、「打楽器の特徴を生かして 2 小節のリズムをつくる」「3 人の組になってリズムアンサンブルをする」といった方法が示されている。指導案を検討する中で、教科書にある「打楽器の音色の特性を生かしてリズムをつくる」「3 人で違うリズムを拍に合わせて演奏する」の活動は、児童の実態からその難しさが懸念された。

そこで、「仲間と拍に合わせてリズムアンサンブルをつくりましょう」という課題を設定した。リ

リズムアンサンブルの内容は、「1小節のリズムをつくる」「つくった2人で合わせてリズムを4小節繰り返す」「5小節目は、 $\frac{4}{4}$ のリズムで終わる」「2人で出だしやテンポを正確に合わせて手拍子で演奏する」とした。活動の主な流れは、Table 11の通りとする。

Table 11 リズムアンサンブルの主な活動の流れ（詳細は【資料3】）

No	内容
(1)	リズムカードを用いて、4分の4拍子で1小節のリズムをつくる。
(2)	メンバーとリズムアンサンブルを行う。 【役割分担】3回演奏後に、役割をローテーションし、繰り返す。 ・リズムプレイヤー（2名） *リズムを演奏する ・テンポキーパー（1～2名） *テンポを提示する ・リスナー（1名） *演奏を「出だしが合っていたか」「終わりが合っていたか」「拍に合っていたか」という視点で聴き、意見を言う。
(3)	グループの発表を聴き合う。
(4)	自分のつくったリズムを書く。（ワークシート【資料5】）
(5)	振り返りを書く。（ワークシート【資料5】）

(1)のリズムをつくる活動では、「リズムカード(Figure 9)」を用いた。1枚のリズムカードには、「リズム遊び（常時活動）」で扱ったリズムが2拍分書かれている。児童は、



Figure 9 リズムカードの一部

「リズムカード」からリズムを選んだり、順番を入れ替えたりしながら、1小節のリズムづくりをさせた。リズムを読んだりたたいたりすることに苦手意識をもつ児童も、既習事項を活用して臨めるようにした。

(2)では、演奏して終わりではなく、「リスナー」から意見をもらうことで、拍に合わせたリズムアンサンブルとなるよう繰り返し練習させた。(3)のグループの発表を聴き合う活動では、拍に合ったリズムアンサンブルの心地よさにふれさせた。何を意識すれば、拍に合ったリズムアンサンブルになるのかを意見交換させた。(4)では、記譜に対する苦手意識のある児童も取り組みやすいように、リズムカードを参考にして、リズムの記譜をさせた。(5)では、「リズムアンサンブルをする時に、どんなことに注意したか」「次時で注意したいこと」に注目させた。次時では、前時の振り返りを基にして、仲間と拍に合わせるために、意識させることを想起させた。この単元で身に付けた拍感やリズムに対する理解と演奏技能は、旋律づくりでも生かされると考えた。

3.3.3.2 「和音の音で旋律づくり」での学習の流れとタブレットPCの位置付け【資料4】

課題①「和音にふくまれる音を使って4小節の旋律をつくろう」では、教師が予め、教科書に掲載されている和音伴奏を音楽作成ソフトへ入力したもの（和音伴奏の再生機）を3～4人のグループに1台配付した。「リズムを変えて、気に入った旋律に仕上げる」活動では、「リズムづくりの補助的機能」として、1台追加配付した。主な活動の流れは、Table 12の通りである。

課題②「和音にふくまれる音を使って、小学校生活の思い出ソングをつくろう（8小節）」では、教科書に提示されている4小節の和音進行の前に、指導者が新たに作成した4小節の和音進行を挿入

した、計 8 小節のものを提示した。グループでの活動が活性化しやすいように、1 グループを 3~4 人とした。伴奏は、タブレット PC に入力しておいた。主な活動の流れは、Table 13 の通りとする。和音伴奏に合わせて演奏し、音を何度も確かめながら歌詞や旋律を試行錯誤する中で、オリジナルの思い出ソングづくりをさせた。

Table 12 課題①の主な活動の流れ（詳細は【資料 4】）

No	内容
(1)	4 小節の和音を聴き、響きの移り変わりを確かめる。 *音楽作成ソフトにて和音伴奏を再生し、それぞれの和音の響きを確かめる。
(2)	和音にふくまれる音を使って旋律をつくる。(ワークシート【資料 6】) *最初は二分音符、または全音符でつくる。 (タブレット PC で和音伴奏を再生しながら、楽器で演奏して旋律をつくる。)
(3)	つくった旋律を聴き合い、互いに感想を交流する。 *音楽作成ソフトの和音伴奏を再生しながら楽器で演奏し、グループ内で聴き合う。互いに感想を交流する。
(4)	つくった旋律のリズムを工夫して、気に入った旋律に仕上げる。(ワークシート【資料 6】) *リズムづくりが難しい時には、音楽作成ソフトのリズムを再生し、リズムを工夫して旋律をつくる。 *音楽作成ソフトの和音伴奏を再生し、和音を意識して旋律づくりをする。
(5)	つくった旋律を聴き合い、互いに感想を交流する。 *音楽作成ソフトの和音伴奏を再生しながら楽器で演奏し、グループ内で聴き合う。互いに感想を交流する。
(6)	五線譜に気に入った旋律を書く。(ワークシート【資料 6】)

Table 13 課題②の主な活動の流れ（詳細は【資料 4】）

No	内容
(1)	思い出ソングの歌詞に入れたい言葉を出し合う。 *1人で言葉を考える→グループ内で交流する→ワークシートへ書く
(2)	和音にふくまれる音を使って旋律をつくる。(ワークシート【資料 7】) *最初は二分音符、または全音符でつくる。 (タブレット PC で和音伴奏を再生しながら、楽器で演奏して旋律をつくる。) *1人で考えてつくる→グループ内で交流する→1つにまとめる
(3)	歌に入れたい言葉や歌詞を参考にし、(2)の活動でつくった旋律のリズムを変更しながら歌をつくる。(ワークシート【資料 8】) *旋律と言葉を組み合わせる際に、リズムについて分からない時は、タブレット PC でリズムパターンを再生して確認する。 *グループ (3~4 名) で話し合いながら、音やリズムを工夫して歌いやすい歌になるようにする。

3.3.3.3 「音楽づくり」を支える授業の流れ

平野 (2016) は、「音楽づくり」について、「並々ならぬ思考力や判断力を要する」「音楽づくりをやらないのは思考力を育てていないのと同じ」とし、「音楽づくり」の重要性を述べている。高倉 (2016) は、「創造性を育てるという意味では、『音楽づくり』の役割は大きい」と位置付けている。石田 (2011) は、「音楽づくり」は、「音楽科における問題解決型学習であり、思考力・判断力・表現力等の育成及

び発揮の場であり、「活用・探究の場」と述べている。

本市では、「問題解決能力を向上させるためには、児童たちが持つ既存の知識・技能を活用して、解決すべき問題を理解し、解決のための見通しを持って実行するというプロセスが必要である」とし、5つのプロセスを含む授業づくり（以下「四日市モデル」）を推進している（Figure 10）。本研究の授業と「四日市モデル」との関係を示すと以下の通りとなる。

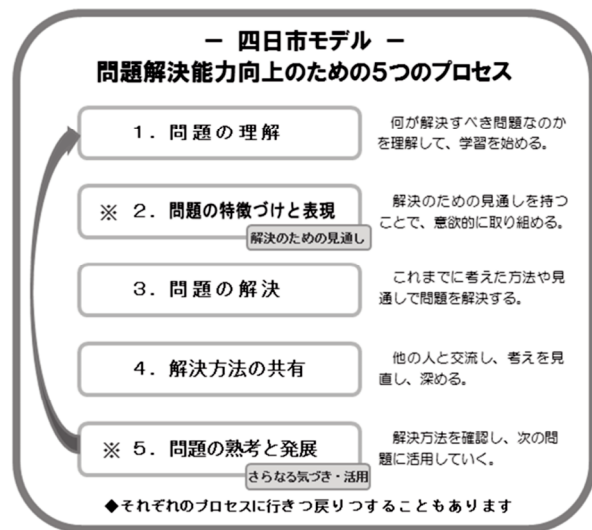


Figure 10 「四日市モデル」

第1プロセス「問題の理解」では、問題と
の出合わせ方を工夫し、何が解決すべき問題なのかを理解させた。

第2プロセス「問題の特徴づけと表現（解決のための見通し）」では、常時活動やリズムアンサンブルの授業で学んだことなどを手がかりとして、解決の道筋を見出させた。課題①で行った旋律づくりの流れが、「小学校生活の思い出ソングをつくる（課題②）」に活用できることに気付かせ、見通しをもって臨ませようとした。【資料3】【資料4】

第3プロセス「問題の解決」では、見通しに基づいて、課題を解決させた。考える時間を一人一人に保障し、考えをもたせた。リズムアンサンブルでは、「自分のつくったリズムを正確に演奏する」「役割分担をし、仲間と拍に合わせてリズムアンサンブルをつくる」活動である。課題①②では、旋律づくりにおいて、「和音にふくまれる音を選び、旋律をつくる」活動などがある。

第4プロセス「解決方法の共有」では、解決して得られたことや解決方法を他者と交流し、自分の考えや解決方法を見直したり、深めたりさせた。リズムアンサンブルでは、「グループの発表を聴き、感想を交流する」活動を行った。課題①②では、「グループ内で、つくった旋律を聴き合い、感想や意見の交流」「歌詞に入りたい言葉を参考にし、(2)の活動でつくった旋律のリズムを変更しながら歌をつくる」活動などである。

第5プロセス「問題の熟考と発展（さらなる気づき・活用）」では、解決の方法やその正しさを確認し、次の問題に活用させた。リズムアンサンブルでは、振り返りにて「次時で注意したいこと」「これからの音楽の授業に生かしたいこと」などに注目させた。次時の冒頭にて、振り返りを発表させ、次の問題解決への活用をさせた。「和音の音で旋律づくり」では、「旋律づくりの際の工夫」「音楽づくりをした感想」についてふれ、これまでの学びの振り返りをさせた。

また、中島他（2016）が挙げた「常時活動」は、解決のための見通しを持ちやすくなる点で、「四日市モデル」の第2プロセスと親和性があると考えた。第2プロセスを意識することで、児童が「音楽づくり」に対して、既習事項を拠り所にし、見通しをもって「音楽づくり」に臨むことができると考えた。

3.4 研究計画

研究計画は Table 14 の通りである。

Table 14 研究計画

月	本研究に関する計画	実施する内容・研究協力校との連携
4	課題研究打ち合わせ会	・研究協力校へ依頼
5	第1回課題研究会議 第2回課題研究会議	・研究協力員との打ち合わせ ・調査対象クラスの授業参観
6	第3回課題研究会議	・事前意識調査実施 ・常時活動開始 ・「リズムをつくってアンサンブル」(音楽づくり) 検証授業 (3時間)
9	第4回課題研究会議	・「星の世界」(歌唱・器楽) 授業 (6時間)
10	第5回課題研究会議	・「和音の音で旋律づくり」(音楽づくり) 検証授業 課題①「和音にふくまれる音を使って4小節の旋律をつくろう」(3時間)
11	第6回課題研究会議	課題②「和音にふくまれる音を使って、小学校生活の思い出ソングをつくろう (8小節)」(6時間) ・事後意識調査実施
12	第7回課題研究会議	
1	第8回課題研究会議	
2	第9回課題研究会議	

4 結果

4.1 活性化された姿に相当すると考えられる「音楽への関心・意欲・態度」「音楽表現の創意工夫」「音楽表現の技能」における観点の評価の変化

4.1.1 「音楽への関心・意欲・態度」における観点の評価の変化

「リズムをつくってアンサンブル」「和音の音で旋律づくり課題①『和音にふくまれる音を使って4小節の旋律をつくろう』」「和音の音で旋律づくり課題②『和音にふくまれる音を使って、小学校生活の思い出ソングをつくろう (8小節)』」において、評価を行った。

単元ごとの評価であるため、和音の音で旋律づくりは、課題①②を1つにまとめた評価も考えていた。しかし、課題②は「歌詞と旋律の組み合わせ」が伴うため、評価規準が課題①に比べ難しくなることから、それぞれ分けて評価することとした。

「音楽への関心・意欲・態度」は、Figure 11 にあるように、A評価の児童が19%から40%に増加した。C評価の児童は、7%から1%に減少する結果となった。

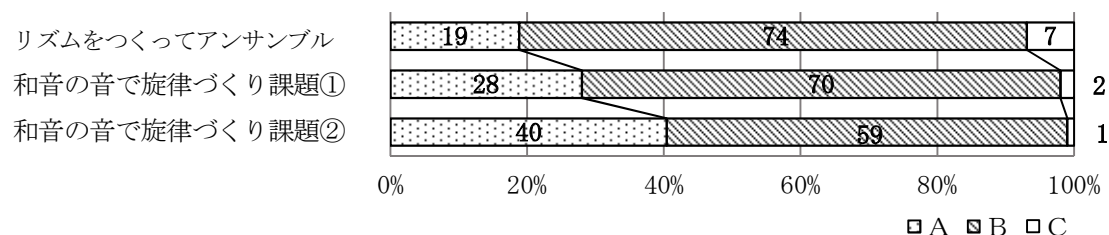


Figure 11 評価結果 (音楽への関心・意欲・態度)

4.1.2 「音楽表現の創意工夫」における観点の評価の変化

「音楽表現の創意工夫」は、Figure 12にあるように、A評価の児童が17%から33%に増加した。C評価の児童は、14%から1%に減少する結果となった。

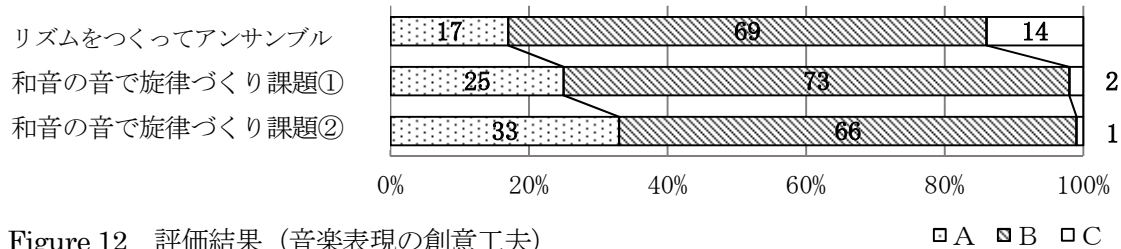


Figure 12 評価結果（音楽表現の創意工夫）

4.1.3 「音楽表現の技能」における観点の評価の変化

「音楽表現の技能」は、Figure 13にあるように、A評価の児童が16%から23%に増加した。C評価の児童は、8%から2%に減少する結果となった。

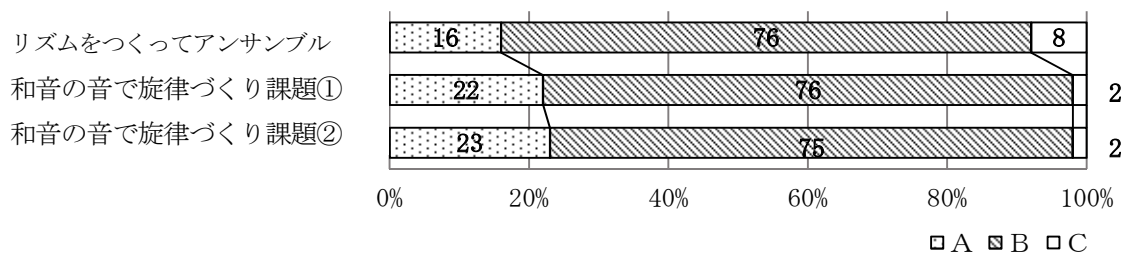


Figure 13 評価結果（音楽表現の技能）

4.2 「音楽づくり」の活性化に関する事前・事後意識調査の結果の変化

4.2.1 意欲的に「音楽づくり」に取り組もうとする児童の増加に関する回答結果

Table 9に示した質問項目に対する回答結果を事前と事後で比較し、以下に示す。Figure 14「音楽の授業は楽しいですか」では、「楽しい」「やや楽しい」と回答した児童が、86%から96%に増加した。「あまり楽しくない」「楽しくない」と回答した児童が、14%から4%に減少した。

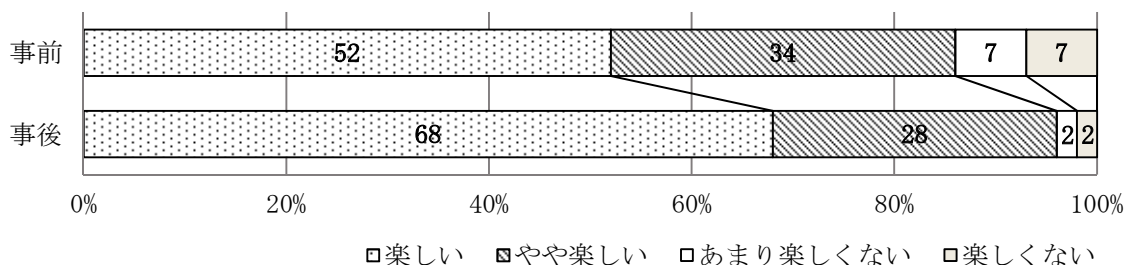


Figure 14 「音楽の授業は楽しいですか」

Figure 15 「音楽づくりの活動は楽しいですか」では、「楽しい」「やや楽しい」と回答した児童が、54%から83%に増加した。「あまり楽しくない」「楽しくない」と回答した児童が、25%から12%に減少した。「分からない」と回答した児童についても、21%から5%に減少した。

Figure 16 「音楽づくりの活動の時、友達と一緒に活動することを楽しんでいますか」では、「楽しい」「やや楽しい」と回答した児童が、77%から96%に増加した。「あまり楽しくない」「楽しくない」と回答した児童が、12%から2%に減少した。「分からない」と回答した児童については、11%から2%に減少した。

Figure 17 「音楽（簡単なせんりつ【メロディー】）をつくってみたいと思いますか」では、「思う」「どちらかといえば思う」と回答した児童が、48%から70%に増加した。「どちらかといえば思わない」「思わない」と回答した児童については、52%から30%に減少した。

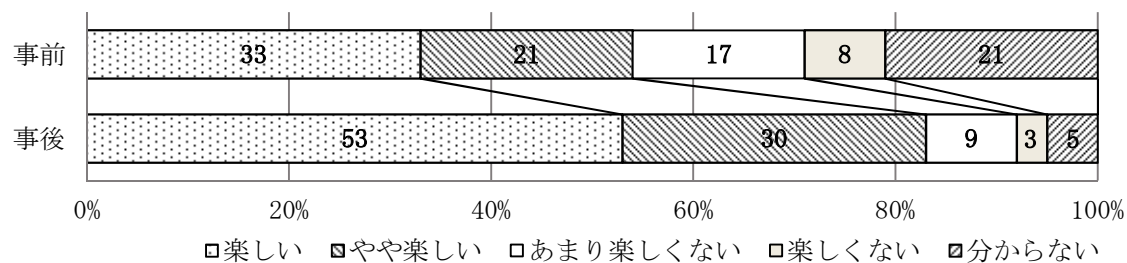


Figure 15 「音楽づくりの活動は楽しいですか」

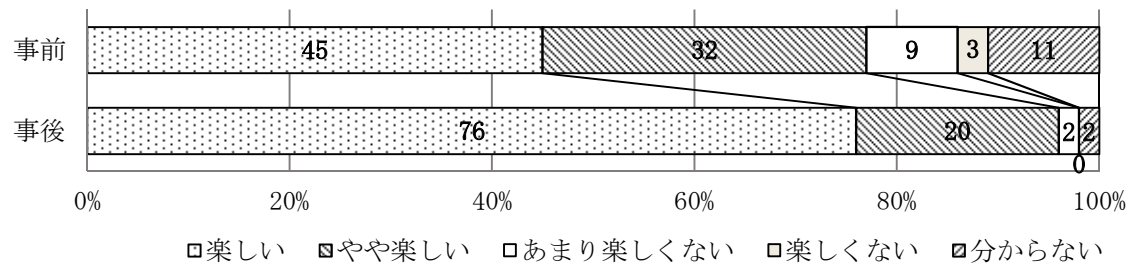


Figure 16 「音楽づくりの活動の時、友達と一緒に活動することを楽しんでいますか」

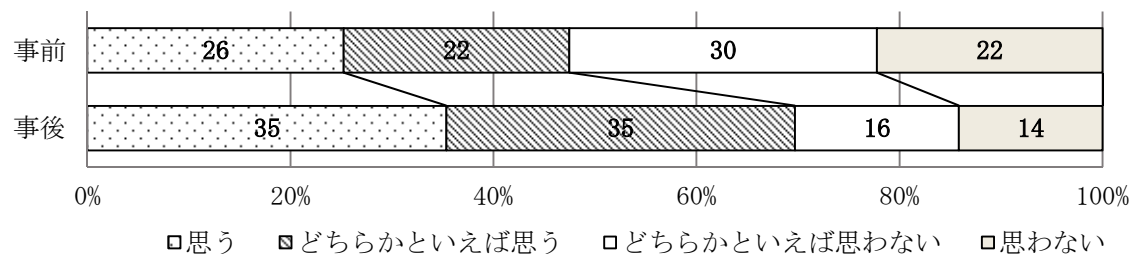


Figure 17 「音楽（簡単なせんりつ【メロディー】）をつくってみたいと思いますか」

Figure 18 「音楽づくりの活動の時、自分のイメージや思いを演奏や楽譜で表すことは好きですか」では、「好き」「どちらかといえば好き」と回答した児童が、49%から72%に増加した。「どちらかといえばきらい」「きらい」と回答した児童が、23%から18%に減少した。また、「分からない」と回答した児童は、28%から10%に減少した。

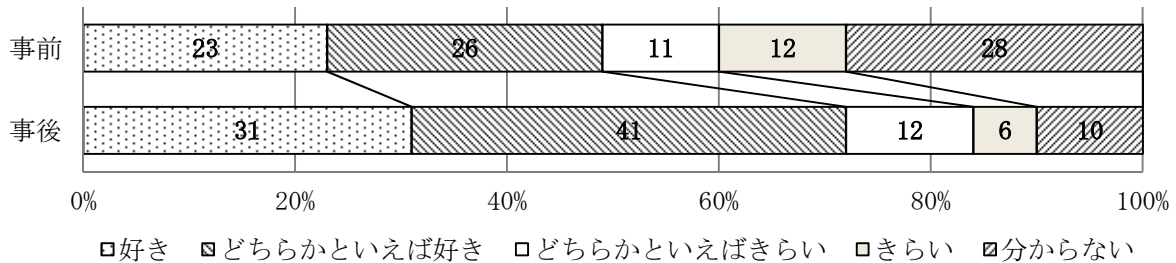


Figure 18 「音楽づくりの活動の時、自分のイメージや思いを演奏や楽譜で表すことは好きですか」

4.2.2 工夫し、見通しをもって「音楽づくり」に取り組む児童の増加に関する回答結果

Table 10 に示した質問項目に対する回答結果を事前と事後で比較し、以下に示す。Figure 19 「音楽づくりの活動では、音楽の授業で学んだことを生かして取り組んでいますか」では、「生かしている」「どちらかといえば生かしている」と回答した児童が、66%から91%に増加した。「どちらかといえば生かしていない」「生かしていない」と回答した児童が、34%から9%に減少した。

Figure 20 「音楽づくりの活動の時、何度も音で確かめながら取り組んでいますか」では、「取り組んでいる」と回答した児童が、46%から88%に増加した。「取り組んでいない」と回答した児童が、16%から9%に減少した。また、「分からない」と回答した児童については、38%から3%に減少した。

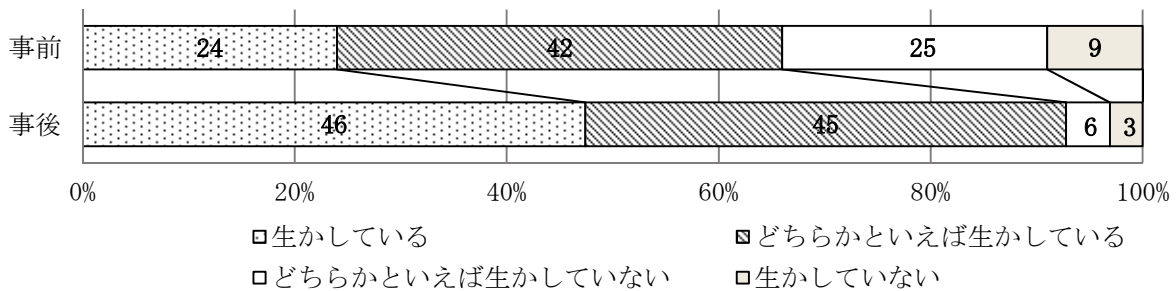


Figure 19 「音楽づくりの活動では、音楽の授業で学んだことを生かして取り組んでいますか」

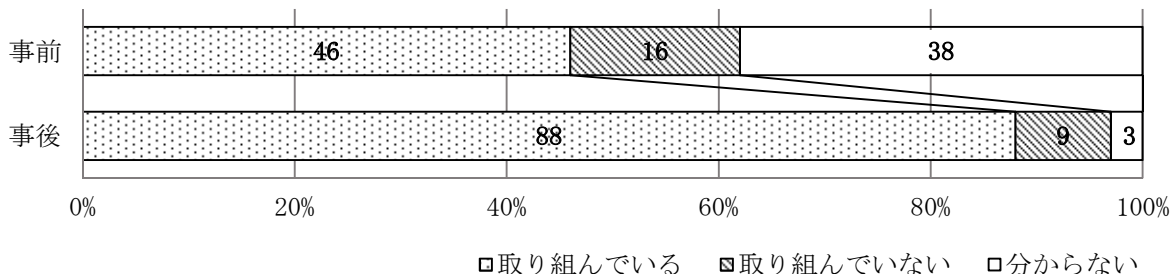


Figure 20 「音楽づくりの活動の時、何度も音で確かめながら取り組んでいますか」

Figure 21 「音楽の授業の中で、グループで活動する時、友達の意見や考えは参考になりますか」では、「参考になる」「どちらかといえば参考になる」と回答した児童が、86%から97%に増加した。「どちらかといえば参考にならない」「参考にならない」と回答した児童が、14%から3%に減少した。

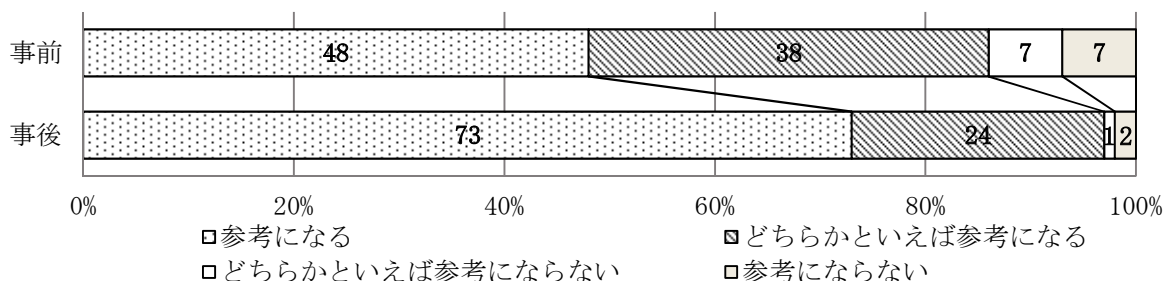


Figure 21 「音楽の授業の中で、グループで活動する時、友達の意見や考えは参考になりますか」

4.3 タブレットPCの活用状況

Figure 22 では、「タブレット PC は、『和音の音で旋律づくり』で役に立ちましたか」について、「はい」と回答した児童が95%であった。「いいえ」と回答した児童は、5%であった。

Table 15 は、タブレット PC の活用回数を計測し、表にしたものである。「和音伴奏再生機としての活用」「リズムづくりの補助的機能としての活用」の活用回数の大きな差は見られない。読譜に対して、「できる」「どちらかといえばできる」と回答した児童を「得意(91名中、48名)」とし、読譜に対して、「どちらかといえばできない」「できない」と回答した児童を「不得意(91名中、43名)」とし、それぞれの平均回数をとった。読譜における「得意」「不得意」による活用回数の大きな差は見られなかった。なお、事後調査での自由記述の代表的なものは、Table 16 の通りであった。

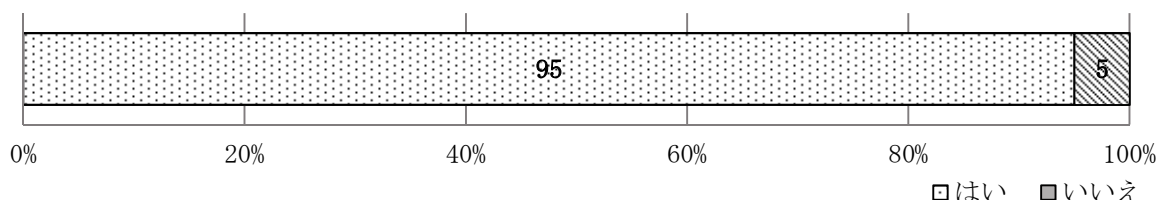


Figure 22 「タブレット PC は、『和音の音で旋律づくり』で役に立ちましたか」

Table 15 タブレット PC の活用回数 (平均活用回数)

	和音伴奏の再生機としての活用		リズムづくりの補助的機能としての活用	
	読譜が		読譜が	
和音の音で旋律づくり課題① (1回の授業の平均活用回数)	得意と回答した児童	不得意と回答した児童	得意と回答した児童	不得意と回答した児童
	4.25回	4.48回	3.31回	4.11回
和音の音で旋律づくり課題② (1回の授業の平均活用回数)	得意と回答した児童	不得意と回答した児童	得意と回答した児童	不得意と回答した児童
	4.51回	4.58回	3.82回	3.98回

Table 16 タブレット PC の活用に関する児童の記述

(a) 和音伴奏の再生機としての活用
<ul style="list-style-type: none"> ・伴奏を何度も聴くことができました。 ・伴奏に合わせて演奏できたので、便利でした。
(b) リズムづくりの補助的機能としての活用
<ul style="list-style-type: none"> ・リズムが分からないときに、タブレット PC のリズムをつかって、リズムをつくることができました。 ・歌詞とメロディーを組み合わせるときに、最初はすごく苦労したけど、タブレット PC を使ったらどんどんできるようになってきて、最後はすごく楽しみながら学ぶことができました。

5 考察

5.1 本研究の成果

以上の結果から、「常時活動にて、『音楽づくり』の土台となる既習事項（器楽・リズム・楽譜の理解）の習熟を図る」「タブレット PC の補助的活用」が、「音楽づくりの活性化」に有効であるかを検討すると以下の通りとなる。

5.1.1 活性化された姿に相当すると考えられる「音楽への関心・意欲・態度」「音楽表現の創意工夫」「音楽表現の技能」における観点の評価の変化

5.1.1.1 「音楽への関心・意欲・態度」における観点の評価の変化

「音楽への関心・意欲・態度」については、Figure 11 にあるように、A 評価の児童が増加し、C 評価の児童が減少した。当初、「リズムをつくってアンサンブル」に比べ、「和音の音で旋律づくり」は学習内容が難しく、意欲の低下を懸念していた。しかし、「リコーダーリレー」の際に、即興的な旋律を評価し、「リコーダーリレーは、実は、作曲に相当する」「2 小節の作曲ができています」など、児童に伝えてきたことで、児童の「音楽づくり」に対する難しさを軽減することができた。

5.1.1.2 「音楽表現の創意工夫」における観点の評価の変化

「音楽表現の創意工夫」についても、Figure 12 にあるように、A 評価の児童が増加し、C 評価の児童が減少した。「四日市モデル」の第 2 プロセスを意識し、「音楽づくり」に必要な「リズムについての理解」を「リズム遊び」にて養い、「即興での旋律づくり」を「リコーダーリレー」にて取り組んできた。「和音の音で旋律づくり」では、第 2 プロセスにて「旋律づくりは、今までもリコーダーリレーで行ってきた」ことを想起させることで、活動の見通しをもつことにつながった。また、「つくった旋律（2 分音符・全音符）のリズムを変えて気に入った旋律に仕上げる活動」では、「リズム遊び」で扱ったリズムが使用できることに気づかせることで、リズムの変更に見通しをもつことができた。このように、「四日市モデル」の第 2 プロセスを意識することで、見通しをもって、「音楽づくり」に取り組むことができたと考えられる。

5.1.1.3 「音楽表現の技能」における観点の評価の変化

「音楽表現の技能」についても、Figure 13にあるように、A評価の児童が増加し、C評価の児童が減少した。「つくった旋律のリズムを工夫する活動」や「歌詞と旋律の組み合わせを意識して、まとまりのある歌をつくる活動」では、停滞してしまう児童もいた。しかし、仲間と課題の確認をしたり、仲間のつくる旋律を聴いたりする中で、歌づくりが促進された。

5.1.2 「音楽づくり」の活性化に関する事前・事後意識調査の結果の変化

5.1.2.1 意欲的に「音楽づくり」に取り組もうとする児童の増加に関する回答結果からの考察

意欲に関わる事前・事後意識調査については、彌永・吉田（2015）の先行研究を参考にした。先行研究の質問項目「音楽の授業は楽しい」はFigure 14、「音楽をつくる活動のとき、友達と一緒に活動することを楽しんでいる」はFigure 16、「ふだんの生活の中で音楽をつくってみたいと思う」はFigure 17、「音楽をつくる活動のとき、自分のイメージや思い、場面や様子などを音や音楽で表すことは好きである」はFigure 18、と関連している。彌永・吉田（2015）は、『『自律的活動力』の育成に焦点を当てて』研究を進めており、これらの結果から「主体的に音楽づくりに取り組むことができた」と結論づけている。

Figure 14「音楽の授業は楽しいですか」、Figure 15「音楽づくりの活動は楽しいですか」では、「楽しい」「やや楽しい」と回答した児童が増加した。多くの児童が、「音楽づくり」を楽しみながら活動していたことが分かる。Figure 16「音楽づくりの活動の時、友達と一緒に活動することを楽しんでいますか」についても、事後調査では、96%の児童が「楽しい」「やや楽しい」と回答している。事前調査より19%高い。仲間との「音楽づくり」が楽しく、意欲的に取り組めた児童が増えたことが分かる。

Figure 17「音楽（簡単なせんりつ【メロディー】）をつくってみたいと思いますか」では、事後調査にて、70%の児童が、「思う」「どちらかといえば思う」と回答した。事前調査より22%高い。「リコーダーリレー」「旋律づくり（4小節）」「思い出ソングづくり（8小節）」と活動自体は難しくなるが、既習事項を基に取り組めたことで、「もっと音楽をつくってみたい」と思う児童が増えたと考えられる。

Figure 18「音楽づくりの活動の時、自分のイメージや思いを演奏や楽譜で表すことは好きですか」では、「好き」「どちらかといえば好き」と回答した児童が72%に増加している。事前調査より23%高い。「リコーダーリレー」にて即興での旋律づくりの取組を継続したこと、自分たちがつくった旋律であることにより、つくった旋律を演奏することへの抵抗感が薄れた可能性があると考えられる。

5.1.2.2 工夫し、見通しをもって「音楽づくり」に取り組もうとする児童の増加に関する回答結果からの考察

Figure 19「音楽づくりの活動では、音楽の授業で学んだことを生かして取り組んでいますか」では、「生かしている」「どちらかといえば生かしている」と回答した児童が、事後調査にて91%に増加し

た。事前調査より 25%高い。Figure 20「音楽づくりの活動の時、何度も音で確かめながら取り組んでいますか」では、「取り組んでいる」と回答した児童が、事後調査にて 97%に増加した。事前調査より 35%高い。既習事項を抛り所にし、何度も音で確かめ、工夫しながら「音楽づくり」をする児童が増えたことがうかがえる。

Figure 21「音楽の授業の中で、グループで活動する時、友達の意見や考えは参考になりますか」では、「参考になる」「どちらかといえば参考になる」と回答した児童が、事後調査にて、97%となっている。事前調査より 11%高い。仲間の意見も取り入れながら、「音楽づくり」をすることができたと考える。

5.1.3 タブレット PC の活用状況からの考察

Figure 22 で示したように、「和音の音で旋律づくり」において、タブレット PC が役に立ったと回答している児童は 95%と高い。また、Table 15 の「タブレット PC の活用回数（平均活用回数）」では、「和音伴奏再生機」「リズムづくりの補助的機能」としての活用差が見られないことから、どちらも活用されていたことが分かる。読譜における得意・不得意による活用頻度差も見られないことから、読譜能力の高低とタブレット PC の活用頻度に差異がなく、タブレット PC が「音楽づくり」に活用されたと考えられる。Table 16 にあるように、児童の記述からも、「和音伴奏再生機」「リズムづくりの補助機能」として「音楽づくり」の役に立ったことが分かる。

5.1.4 「音楽づくり」の活性化

5.1.4.1 意欲的に「音楽づくり」に取り組もうとする児童の増加

Figure 11 の A 評価の児童増加、Figure 14・15・16 の「音楽の授業」「『音楽づくり』の活動」「音楽づくりの活動の時、友達と一緒に活動することを楽しんでいますか」について、「楽しい」「やや楽しい」と回答した児童の増加、Figure 17・18 の「音楽をつくってみたいと思いますか」「音楽づくりの活動の時、自分のイメージや思いを演奏や楽譜で表すことは好きですか」について、肯定的な回答をした児童の増加から、意欲的に「音楽づくり」に取り組めた児童が増加した。常時活動により、児童が既習事項を基にして、意欲的に「音楽づくり」に取り組むことができたと考えられる。

5.1.4.2 工夫し、見通しをもって「音楽づくり」に取り組む児童の増加

Figure 12 の A 評価の児童増加、Figure 19・20・21 から、工夫し、見通しをもって「音楽づくり」に取り組む児童が増加したと考える。常時活動「リズム遊び」により、活用できるリズムを増やし、「リコーダーリレー」にて、即興的な旋律づくりを繰り返すことで、「音楽づくり」の見通しをもつことに有効に働いたと言える。

また、Figure 22・Table 15、Table 16 の児童の記述より、タブレット PC の「和音伴奏再生機」としての活用は、伴奏をタブレット PC が担うことで、児童が旋律づくりや歌づくりに専念することに有効であったと考える。また、リズムをつくる際においても「リズムづくりの補助機能」として有効であったと考えられる。

5.1.4.3 音を音楽に構成し、演奏する技能の高まった児童の増加

Figure 13 の A 評価の児童増加から、音を音楽に構成し、演奏する技能の高まった児童が増加したと考える。活動が停滞していた児童も、「仲間と課題の確認をする」「仲間のつくる旋律を聴く」中で、活動が促進された。演奏技能については、タブレット PC が「和音伴奏の再生機」となることで、つくった旋律や歌を何度も練習することができ、演奏技能の習熟につながったと考えられる。

5.1.4.4 「音楽づくり」の活性化に関する「常時活動」「タブレット PC の補助的活用」の有効性

これまで、「音楽づくり」の活性化について「音楽への関心・意欲・態度」「音楽表現の創意工夫」「音楽表現の技能」における観点の評価の変化、「音楽づくり」の活性化に関する事前・事後意識調査の結果の変化、タブレット PC の活用状況から、「音楽づくり」の活性化について考察をしてきた。以上のことから、「常時活動にて、『音楽づくり』の土台となる既習事項（器楽・リズム・楽譜の理解）の習熟を図る」「タブレット PC の補助的活用」が、「音楽づくり」の活性化に有効であったと考える。有効性について、以下にまとめる。

常時活動によって、児童が「音楽づくり」の際、既習事項を拠り所として、見通しをもって取り組むことができた。教師にとっての「音楽づくり」の難しさの要因の一つである「児童に思いや意図をもたせる手段の不足」を補うことにもつながった。先に挙げた中島他(2016)の『「常時活動」をキーワードにして、授業に取り組むことで『問題の解決の糸口が見えてくる』『音楽科の授業を通して、どんな児童を育てたいのかがさらに明らかになってくる』』にあるように、教師が「音楽づくり」の学習の進め方、指導方法についてのイメージを持ちやすくなったと言える。

タブレット PC は、渡辺(2016)、山崎(2012)、彌永・吉田(2015)の研究にある児童による音符の入力や編集は行わなかった。児童の行う操作を「再生」「停止」「選択」に限定することで、「和音伴奏の再生機」として、伴奏する際の演奏技能に左右されることなく、和音を意識しながら旋律や歌づくりに専念させることができた。「リズムづくりの補助的機能」としても、リズムを視覚的に確認し、リズムを工夫しながら「音楽づくり」をすることができた。

5.2 本研究の課題

5.2.1 6年間を見通した系統性のある「常時活動」「共通事項」の研究

本研究では、「常時活動にて、『音楽づくり』の土台となる既習事項（器楽・リズム・楽譜の理解）の習熟を図る」「タブレット PC の補助的活用」をし、「音楽づくり」活性化を図ることについて検証してきた。「音楽づくり」における常時活動、タブレット PC の補助的活用の有効性については、成果はあった。しかし、「『音楽づくり』と基本的な知識・技能の定着との密接な関係（既習事項の習熟課題）」を克服していくことへの難しさは課題として残った。

検証授業に入る前に、「星の世界」の歌唱・器楽の活動を行った。歌唱では、表情豊かに表現しようとする児童がいる中、音程がうまく取れなかったり、恥ずかしさもあり、口や喉を適切に開けて歌

うことに難しさを感じたりする児童がいた。器楽においても、リコーダーの運指の難しさから、音程や音色が定まらず、表情が曇ってしまう児童の姿があった。既習事項の定着を指導時間の制約がある中で行っていく必要がある。

常時活動で行った「リズム遊び」は、リズム譜に慣れ、音符やリズム譜に対する理解を図るために導入した。体を揺らして、リズム打ちをする児童がいる一方、考えずにリズム打ちをする児童の姿もあった。目的意識を明確に持たせるために、「何を意識して演奏するのか」といった声かけや、「リズムの組み合わせを変える」「リズムの数を増やす」といった変化のある繰り返しを行う必要があった。

リコーダーリレーについては、旋律変化の見られた児童がいる中、リズムや音選びが一定で旋律変化が見られなかった児童もいた。「仲間の音の使い方に注意して聴こう」「自分の演奏に活用できないか意識して聴こう」といった目的意識と、児童たちの即興演奏の表現を広げる手だてが十分でなかった。6年間を見通した系統性のある常時活動の研究についても残された課題である。

今村・酒井（2012）は、歌唱・器楽・鑑賞との懸け橋となる「共通事項」の重要性を挙げている。共通事項とは、「様々な音楽活動を関連させながら、学年の目標の実現をめざすための支え」としている。低学年から高学年に至るまで、日々の授業において共通事項を意識した授業展開の研究も「音楽づくり」の活性化への糸口と言えよう。

5.2.2 児童の実態・教室環境に合わせたタブレットPCの補助的活用

タブレットPCは、各グループに2台配付した。「和音の音で旋律づくり」では、調査対象のクラスは、1クラス30～34名であったため、1グループを3～4名とし、一番多いクラスで9グループをつくった。計18台のタブレットPCを使用した。また、タブレットPCの内蔵スピーカーでは、音量が小さいため、別途PC用のスピーカーが必要だった。準備や片づけを児童にさせることも考えたが、「音楽づくり」の時間を確保するため、教師が行った。そのため、授業時間以外に、準備や片づけに多くの時間がかかることとなった。

用意するタブレットPCの台数を減らすうえで、1グループの人数を5名にすることも検討したが、人数を増やすとタブレットPCを活用する機会も減ることが懸念された。また、人数が多いと「自分が活動しなくても、仲間が活動を進めてくれる」と思う児童が現れることも予想されたため、3～4名とした。

音の交錯を避けるため、等間隔でグループ間を離す必要があったが、本研究では、今回2教室使用できたため、9グループで活動することができた。しかし、検証授業の際、児童が2教室に分かれることで、研修員が指導と共に評価をしていくことが難しく、研究協力員の協力を得ることが必要であった。

これらのことから、児童の実態、教室などの環境に合わせて、最適な1グループの人数やタブレットPCの配置を考えていく必要がある。また、1グループの人数が多くても、グループ活動が停滞しないよう手だてを考えることも課題として残った。

引用文献

- 平野 次郎 (2016). 先生, 楽しいね! とよせせる音楽づくり入門ワザ 21 鈴木音楽産業
- 今村 央子・酒井 美恵子 (2012). 楽しくつくるアイデア満載! 「音楽づくり」成功の授業プラン 明治図書
- 石田 佳裕 (2011). 小学校音楽科における「音楽づくり」に関する研究 平成 23 年度金沢大学大学院修了者研究報告 (概要), 1-4.
- 彌永 有香・吉田 真紀 (2015). 「自律的活動力」を育む音楽科学習の展開 平成 27 年度熊本県立教育センター研究紀要, 1-5.
- 鹿児島音楽教育 ICT 研究グループ (2014). 音楽科における ICT を活用した授業の効果に関する研究 公益財団法人パナソニック教育財団 http://www.pef.or.jp/db/pdf/2014/2014_76.pdf (2017 年 7 月 3 日)
- 北尾 倫彦・山森 光陽・鈴木 秀幸・金森 正武 (2011). 観点別学習状況の評価規準と判定基準[小学校音楽] 図書文化社
- 古賀 陽子・裏西 仁・橋口 加奈子・前田 若菜 (2014). 思いや意図をもって表現する児童を育てる音楽づくりの学習指導-「まとまりのある音楽」をつくるための支援 福岡市教育センター音楽科研究室研究紀要, 952, 1-31.
- 国立教育政策研究所 (2013). 評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料[小学校音楽] 教育出版
- 文部科学省 (2008). 小学校学習指導要領解説音楽編 教育芸術社
- 毛利 友紀・青柳 美里・伊藤 由佳子・三浦 芳子 (2014). 音楽を形づくっている要素から生み出す創造的な「音楽づくり」「創作」-児童たちが発想をふくらませ, 見通しをもってつくるための指導の工夫- 川崎市総合教育センター研究紀要, 28, 37-56.
- 中島 寿・高倉 弘光・平野 次郎 (2016). 音楽の力×コミュニケーションでつくる音楽の授業 東洋館出版社
- 渡辺 景子 (2016). タブレット型端末を活用した音楽創作授業の検証 (3) 日本デジタル教科書学会年次大会発表原稿集, 5, 87-88.
- 山崎 浩隆 (2012). タブレット型端末を使った「音楽づくり」の授業実践 九州地区国立大学教育系・文系研究論文集, 6 (1), 1-7.
- 四日市市教育委員会 (2017). 問題解決能力向上のための授業づくりガイドブック 2 「四日市モデル」

音楽や音楽づくりの活動に対するアンケート（事前意識調査）

6年 組 席 名前 _____

この質問紙は、「音楽科」について、みなさんの考えていることや学習の様子について、たずねるものです。テストではありませんので、自分の考えていることや思っていることをそのまま答えてください。質問を読んで、そうだと思うものに○をふりましょう。

① 音楽の授業は楽しいですか？	1 楽しい 2 やや楽しい 3 あまり楽しくない 4 楽しくない
② 歌うことは楽しいですか？	1 楽しい 2 やや楽しい 3 あまり楽しくない 4 楽しくない
③ けんぱんハーモニカを演奏することは楽しいですか？	1 楽しい 2 やや楽しい 3 あまり楽しくない 4 楽しくない
④ リコーダーを演奏することは楽しいですか？	1 楽しい 2 やや楽しい 3 あまり楽しくない 4 楽しくない
⑤ 音楽を聴くこと（鑑賞）は、楽しいですか？	1 楽しい 2 やや楽しい 3 あまり楽しくない 4 楽しくない
⑥ 楽譜を読むことはできますか？	1 できる 2 どちらかといえばできる 3 どちらかといえばできない 4 できない
⑦ 楽譜を書くことはできますか？	1 できる 2 どちらかといえばできる 3 どちらかといえばできない 4 できない
⑧ 音楽づくりの活動は、楽しいですか？ 音楽づくりとは、いくつかの音を使ってせんりつ（メロディー）をつくったり（リコーダーリレーなど）、仲間と共にリズムを重ねて演奏したりする活動のことです。	1 楽しい 2 やや楽しい 3 あまり楽しくない 4 楽しくない 5 分からない
⑨ ⑧で1・2を選んだ人に聞きます。選んだ理由を書きましょう。	
.....	
.....	

⑩ ⑧で3・4を選んだ人に聞きます。理由としてあてはまるものに○をしましょう。 いくつかをしてもよいです。 () 楽譜を読むことが苦手 () 楽譜を書くことが苦手 () 楽器を演奏することが苦手 () 歌を歌うことが苦手 () どのようにすればよいのか分からない	
その他【 _____ 】	
⑪ 音楽づくりの活動の時、友達と一緒に活動すること（やりとり）を楽しんでいますか？	1 楽しい 2 やや楽しい 3 あまり楽しくない 4 楽しくない 5 分からない
⑫ 音楽づくりの活動の時、自分のイメージや思いを演奏や楽譜で表すことは好きですか？	1 好き 2 どちらかといえば好き 3 どちらかといえばきらい 4 きらい 5 分からない
⑬ 音楽づくりの活動のとき、何度も音で確かめながら取り組んでいますか。	1 取り組んでいる 2 取り組んでいない 3 分からない
⑭ 日常（ふだんの生活）の中で、簡単なせんりつ（メロディー）を思いつくことがありますか。鼻歌もはいます。	1 ある 2 ない
⑮ 音楽（簡単なせんりつ【メロディー】）をつくってみたいと思いますか。	1 思う 2 どちらかといえば思う 3 どちらかといえば、思わない 4 思わない
⑯ 音楽の授業の中で、友達と協力して取り組んでいますか？	1 協力している 2 どちらかといえば協力している 3 どちらかといえば協力していない 4 協力していない
⑰ 音楽の授業の中で、グループで活動する時、友達の意見や考えは参考になりますか？	1 参考になる 2 どちらかといえば参考になる 3 どちらかといえば参考にならない 4 参考にならない
⑱ 「音楽づくり」の活動では、音楽の授業で学んだこと（覚えた知識や、身につけた技能）を生かして取り組んでいますか？	1 生かしている 2 どちらかといえば生かしている 3 どちらかといえば生かしていない 4 生かしていない

これで質問は終わります。
ありがとうございました。

音楽や音楽づくりの活動に対するアンケート（事後意識調査）

6年 組 席 名前

この質問紙は、「音楽科」について、みなさんの考えていることや学習の様子について、たずねるものです。

テストではありませんので、自分の考えていることや思っていることをそのまま答えてください。質問を読んで、そうだと思うものに○をふりましょう。

① 音楽の授業は楽しいですか？	1 楽しい 2 やや楽しい 3 あまり楽しくない 4 楽しくない
② 歌うことは楽しいですか？	1 楽しい 2 やや楽しい 3 あまり楽しくない 4 楽しくない
③ けんぱんハーモニカを演奏することは楽しいですか？	1 楽しい 2 やや楽しい 3 あまり楽しくない 4 楽しくない
④ リコーダーを演奏することは楽しいですか？	1 楽しい 2 やや楽しい 3 あまり楽しくない 4 楽しくない
⑤ 音楽を聴くこと（鑑賞）は、楽しいですか？	1 楽しい 2 やや楽しい 3 あまり楽しくない 4 楽しくない
⑥ 楽譜を読むことはできますか？	1 できる 2 どちらかといえばできる 3 どちらかといえばできない 4 できない
⑦ 楽譜を書くことはできますか？	1 できる 2 どちらかといえばできる 3 どちらかといえばできない 4 できない
⑧ 音楽づくりの活動は、楽しいですか？ 音楽づくりとは、「リコーダーリレー」「リズムアンサンブル（一学期）」「和音にふくまれる音を使って4小節の旋律をつくらう」「小学校生活の思い出ソングづくり」などの活動のことです。	1 楽しい 2 やや楽しい 3 あまり楽しくない 4 楽しくない 5 分からない
⑨ ⑧で1・2を選んだ人に聞きます。選んだ理由を書きましょう。	

⑩ ⑧で3・4を選んだ人に聞きます。理由としてあてはまるものに○をしましょう。 いくつ○をしてもよいです。 () 楽譜を読むことが苦手 () 楽譜を書くことが苦手 () 楽器を演奏することが苦手 () 歌を歌うことが苦手 () どのようにすればよいのか分からない	
その他【	】
⑪ 音楽づくりの活動の時、友達と一緒に活動すること（やりとり）を楽しんでいますか？	1 楽しい 2 やや楽しい 3 あまり楽しくない 4 楽しくない 5 分からない
⑫ 音楽づくりの活動の時、自分のイメージや思いを演奏や楽譜で表すことは好きですか？	1 好き 2 どちらかといえば好き 3 どちらかといえばきらい 4 きらい 5 分からない
⑬ 音楽づくりの活動のとき、何度も音で確かめながら取り組んでいますか。	1 取り組んでいる 2 取り組んでいない 3 分からない
⑭ 日常（ふだんの生活）の中で、簡単なせんりつ（メロディー）を思いつくことがありますか。鼻歌もはいます。	1 ある 2 ない
⑮ 音楽（簡単なせんりつ【メロディー】）をつくってみたいと思えますか。	1 思う 2 どちらかといえば思う 3 どちらかといえば、思わない 4 思わない
⑯ 音楽の授業の中で、友達と協力して取り組んでいますか？	1 協力している 2 どちらかといえば協力している 3 どちらかといえば協力していない 4 協力していない
⑰ 音楽の授業の中で、グループで活動する時、友達の意見や考えは参考になりますか？	1 参考になる 2 どちらかといえば参考になる 3 どちらかといえば参考にならない 4 参考にならない
⑱ 「音楽づくり」の活動では、音楽の授業で学んだこと（覚えた知識や、身につけた技能）を生かして取り組んでいますか？	1 生かしている 2 どちらかといえば生かしている 3 どちらかといえば生かしていない 4 生かしていない
⑲ タブレットPCは、「和音の音で旋律づくり」で役に立ちましたか？	1 はい 2 いいえ
⑳ 「和音の音で旋律づくり（4小節）」「小学校生活の思い出ソングづくり（8小節）」では、作曲や作詞にチャレンジしましたね。つくってみた感想を書きましょう。	

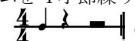
教材名 リズムをつくってアンサンブル

学習目標

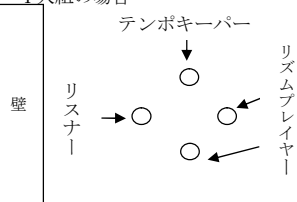
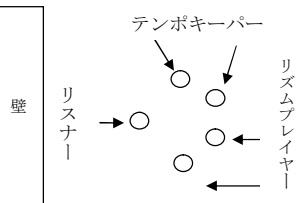
- ・1小節のリズムをつくることができる。
- ・仲間と合わせてリズムアンサンブルをすることができる。
- ・様々なリズムに親しむ。

題材の評価規準（案）		
音楽への関心・意欲・態度（関）	音楽表現の創意工夫（創）	音楽表現の技能（技）
既習のリズムを組み合わせて、1小節のリズムをつくり、仲間とリズムアンサンブルをする学習に主体的に取り組もうとしている。	既習のリズムを組み合わせて、1小節のリズムをつくり、仲間とリズムアンサンブルすることについて、見通しをもっている。	既習のリズムを基に、1小節のリズムをつくり、そのリズムを正確に演奏している。仲間と合わせて、リズムアンサンブルをする際、正確なリズムで演奏することができる。

主な学習の流れ

問題解決のプロセス&学習活動	指導上の留意点等 ◆評価基準【評価方法】
<p>【第1時】 第1プロセス 問題の理解</p> <p>仲間とリズムアンサンブルをつくりましょう。</p> <p>第2プロセス 問題の特徴づけと表現</p> <p>●めあて</p> <p>一小節のリズムをつくらう</p> <p>リズムアンサンブルの進め方（やり方）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・二人のリズムを4小節繰り返す。 ・5小節目は、 のリズムで終わる。 <p><予想される子どもの意見></p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の最初でやっていたリズム遊びとカードが同じ。 ・リズムカードを組み合わせてやってみよう。 <p>第3プロセス 問題の解決</p> <ul style="list-style-type: none"> ●リズムカードを用いて、4分の4拍子で1小節のリズムをつくる。 ●終わった人は、練習をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・4～5人のグループをつくる。 ・教師のリズムアンサンブルを聴いて、めあてについて具体的なイメージをもつ。 ・リズム遊びで使用していたリズムカードを用いるとリズムづくりが行いやすいことに気づかせる。 ・メトロノームを鳴らし、テンポを意識して、リズムをつくらせる。 ・音符を読むことに抵抗感がある子どもは、グループメンバーに聞いてもよいことを伝える。

問題解決のプロセス&学習活動	指導上の留意点等 ◆評価基準【評価方法】
<p>第4プロセス 解決方法の共有</p> <ul style="list-style-type: none"> ●グループ全員がつくり終わったら、つくったリズムの紹介をし合う。 ●仲間がつくったリズムカードの組み合わせを見て手拍子を打つ。 ●「練習タイム」「バージョンアップタイム」のどちらかを選び、取り組む。 <p>【練習タイム】</p> <p>自分のつくったリズムを正確に演奏できるように練習をする。</p> <p>【バージョンアップタイム】</p> <p>リズムを変えて、アレンジを加えてもよい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●自分のつくったリズムをワークシート【資料5】へ書く。 <p>【第2時】 第1プロセス 問題の理解</p> <p>●めあて</p> <p>仲間とリズムアンサンブルをつくりましょう。</p> <p>第2プロセス 問題の特徴づけと表現 第3プロセス 問題の解決</p> <ul style="list-style-type: none"> ●自分のつくったリズムを正確に演奏できるようにする。 ●役割分担をし、仲間と拍に合わせてリズムアンサンブルをつくる。 	<p>◆（関）【行動観察】</p> <p>A：与えられた時間に十分活動して、組み合わせを変えながら、リズムをつくっている。つくったリズムを練習している。</p> <p>B：リズムカードを用いて、リズムをつくっている。つくったリズムを練習している。</p> <p>C：リズムをつくり練習する活動が滞っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仲間とリズムが全く同じ際には、リズムを変えてもよいことを伝える。 ・練習タイム、バージョンアップタイム、それぞれを自分で選ばせ、自分の考えたリズムに親しませたい。 ・リズム譜の書き方が分からない際は、ワークシートのリズム譜を参考にしたり、仲間に関わたりすることを促す。教師もその姿を見守り、適宜アドバイスをする。 ・前時でつくったリズムを仲間と拍に合わせて演奏することを確認する。

問題解決のプロセス&学習活動	指導上の留意点等 ◆評価基準【評価方法】
<p>【役割分担】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リズムプレイヤー（2名） リズムを演奏する ・テンポキーパー（1～2名） テンポを提示する ・リスナー（1名） <p>演奏を「出だしが合っていたか」「終わりが合っていたか」「拍に合っていたか」などの視点で聴き、意見を言う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3回演奏後に、役割を交替し、繰り返す。 <p>第4プロセス 解決方法の共有</p> <ul style="list-style-type: none"> ●グループの中で、拍を正確に合わせてリズムアンサンブルをしたグループは、発表する。 ●数グループの発表を聴き、拍の合ったアンサンブルの心地よさにふれる。 <p>〈予想される子どもの意見〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分だけが正確にリズムをたたいてもうまいかない。 ・テンポをよく聴くことが大切だと思った。 <p>第5プロセス 問題の熟考と発展</p> <ul style="list-style-type: none"> ●ワークシートへ、本時の振り返りを書く。 <ul style="list-style-type: none"> ・「リズムアンサンブルをする時に、どんなことに注意したか」「次時で注意したいこと」に注目させる。 	<p>◆評価基準【評価方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4人組の場合  <ul style="list-style-type: none"> ・5人組の場合  <ul style="list-style-type: none"> ・リズムが難しく、活動が停滞している子どもには、リスナーやテンポの一人が手伝う。(本人の希望を確認する) <p>◆（技）【演奏聴取】</p> <p>A:自分のつくったリズムを「拍」に合わせ、「曲のはじめ」「曲の終わり」など意識しながら、リズムを正確に演奏することができる。</p> <p>B:自分のつくったリズムを正確に演奏している。演奏する中で、時折、リズムの乱れがある。</p> <p>C:つくったリズムを正確に演奏することができない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師の机間指導にて、拍の正確さの見られたペアについてもこちらから紹介していく。

問題解決のプロセス&学習活動	指導上の留意点等 ◆評価基準【評価方法】
<p>【第3時】</p> <p>第1プロセス 問題の理解</p> <p>第2プロセス 問題の特徴づけと表現</p> <ul style="list-style-type: none"> ●めあての確認（3分） <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>前回の活動のふりかえりを生かして、仲間と拍に合わせてリズムアンサンブルをつくりましょう。</p> </div> <p>第3プロセス 問題の解決</p> <ul style="list-style-type: none"> ●自分のつくったリズムを正確に演奏できるようにする。 ●役割分担をし、仲間とリズムアンサンブルをつくる。 <p>第4プロセス 解決方法の共有</p> <ul style="list-style-type: none"> ●グループの中で、拍を正確に合わせてリズムアンサンブルをしたグループは、発表する。 ●数グループの発表を聴き、拍の合ったアンサンブルの心地よさにふれる。 <p>第5プロセス 問題の熟考と発展</p> <ul style="list-style-type: none"> ●ワークシート【資料5】へ、本時の振り返りを書く。 <ul style="list-style-type: none"> ・「リズムアンサンブルをする時に、意識したことができたか」「これからの音楽の授業に生かしたいこと」に注目させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の振り返りをもとにして、仲間と拍に合わせるために、意識したいことを想起させる。 <p>◆（創）【行動観察】</p> <p>A:「曲のはじめ」「曲の終わり」「拍」などの視点で発言し、仲間と意見交流をしながら練習している。</p> <p>B:「拍」という視点で発言し、練習している。</p> <p>C:視点をもって練習しようとする姿が見られない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前時に発表していないグループも発表させ、全てのグループが発表できるようにする。 <p>◆（創）【ワークシートの記述より】</p> <p>A:リズムアンサンブルをする際に、どのように工夫したかについて「曲のはじめ」「曲の終わり」「拍」などを意識した具体的な記述がある。今後の演奏に活用していきたいことについての記述がある。</p> <p>B:リズムアンサンブルをする際に、「拍」を意識した記述がある。</p> <p>C:工夫したことや注意したことについての記述がない。</p>

【題材名】 3. 和音の美しさを味わおう

【題材のねらい】

- ・歌詞の内容にふさわしい歌声で歌う。
- ・リコーダーで主旋律を「ファ#」「シb」の運指に気を付けながら演奏する。
- ・伴奏の響きを感じ取りながら主な旋律を演奏する。
- ・和音に含まれる音を用いて、まとまりのある旋律をつくる。
- ・和音に含まれる音を用いて、小学校生活の思い出ソングをつくる。

「和音の音で旋律づくり 課題①『和音にふくまれる音を使って4小節の旋律をつくろう』

題材の評価規準（「音楽づくり」の箇所のみ記述）		
音楽への関心・意欲・態度（関）	音楽表現の創意工夫（創）	音楽表現の技能（技）
和音の響きや移り変わりに興味・関心をもち、和音に含まれる音や既習のリズムを使って旋律をつくり、まとまりのある旋律に仕上げる学習に主体的に取り組もうとしている。	和音やその移り変わりを聴き取り、その働きが生み出す響きのよさを感じ取りながら、和音に含まれる音や既習のリズムを使って旋律をつくり、まとまりのある旋律に仕上げることに、見通しをもっている。	和音に含まれる音や既習のリズムを基に旋律をつくったり、自分なりのまとまりのある旋律をつくったりしている。聴き手を意識して、正確に演奏することができる。

「和音の音で旋律づくり 課題②『和音にふくまれる音を使って、小学校生活の思い出ソングをつくろう』（8小節）」

題材の評価規準（「音楽づくり」の箇所のみ記述）		
音楽への関心・意欲・態度（関）	音楽表現の創意工夫（創）	音楽表現の技能（技）
和音の響きや移り変わりに興味・関心をもち、和音に含まれる音や既習のリズムを使って旋律をつくり、歌詞と旋律の組み合わせを意識して、まとまりのある旋律に仕上げる学習に主体的に取り組もうとしている。	和音やその移り変わりを聴き取り、その働きが生み出す響きのよさを感じ取りながら、和音に含まれる音や既習のリズムを使って旋律をつくり、歌詞と旋律の組み合わせを意識して、まとまりのある旋律に仕上げることに、見通しをもっている。	和音に含まれる音や既習のリズムを基に旋律をつくったり、歌詞と旋律の組み合わせを意識して、まとまりのある旋律をつくったりしている。聴き手を意識して、正確に演奏することができる。

【主な学習の流れ（音楽づくりは、7時～15時）】

時	星の世界（歌唱3時間）（器楽3時間）
1	発音や発声、旋律の動きに気を付け、主旋律を歌う。
2	曲の構成を知り、ダイナミクスをつけて主旋律を歌う。
3	歌詞の内容にふさわしい歌声で歌う。和音の響きの移り変わりを感しながら歌う。
4	リコーダーで「ファ#」「シb」の運指に気を付けながら演奏する。
5	リコーダーでダイナミクスをつけながら演奏する。
6	伴奏の響きを感じ取りながら旋律を演奏する 「星の世界」の和音伴奏に、主旋律と異なる旋律を教師が演奏したものを聴く。 和音伴奏が同じでも、旋律の異なるものを創ることができることを知る。
時	和音の音で旋律づくり 課題①「和音にふくまれる音を使って4小節の旋律をつくろう」
7 8・9	和音にふくまれる音や二分音符、全音符を使って、4小節の旋律をつくる。 リズムを変えて、気に入った旋律に仕上げる。
時	和音の音で旋律づくり 課題②「和音にふくまれる音を使って、小学校生活の思い出ソングをつくろう」（8小節）
10	歌に入りたい言葉を出し合う。
11	和音にふくまれる音や、2分音符、全音符を使って、歌いやすい旋律をつくる。
12	歌詞を意識して、リズムや音の高さを変えて、歌いやすい歌をつくる。
13	歌詞を意識して、リズムや音の高さを変えて、歌いやすい歌をつくる。
14	「小学校生活の思い出ソング（8小節）」を相手に伝えるように練習する。
15	「小学校生活の思い出ソング（8小節）」を相手に伝えるように歌う。（発表会）

音楽づくりにおける主な学習の流れ

問題解決のプロセス&学習活動	指導上の留意点等 ◆評価基準【評価方法】
<p>【第7時】</p> <p>第1プロセス 問題の理解</p> <p>和音にふくまれる音を使って4小節の旋律をつくろう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・前時に、「星の世界」の和音伴奏に、主旋律と異なる旋律を教師が演奏したものを聴いている。 ・和音伴奏が同じでも、旋律の異なるものを創ることができることをふまえ、オリジナルの旋律をつくってみたいという関心をもたせる。
<p>第2プロセス 問題の特徴づけと表現</p> <p>●めあて</p> <p>和音にふくまれる音や二分音符、全音符を使って、4小節の旋律をつくろう。</p> <p>〈予想される子どもの意見〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リコーダーリレーのように音を選んでやってみよう。 ・和音の音から選んでいこう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師が予め、3～4人のグループをつくっておく。
<p>●4小節の和音（ハ長調）と低音を聴き、全員で響きの移りかわり確かめる。</p> <p>I→IV→(I→V7)→I（教科書 P26）</p> <p>*タブレット PC の活用（和音伴奏の再生機）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タブレット PC にて和音伴奏を再生し、それぞれの和音の響きを確かめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・タブレット PC の伴奏に合わせて和音を感じながら旋律をつくることを促す。
<p>第3プロセス 問題の解決</p> <p>●教科書の例（二分音符で三小節、四小節目は全音符）を参考に、実際にリコーダーや鍵盤ハーモニカで音を出しながら、和音に含まれる音を選び、旋律をつくる。</p> <p>●気に入った旋律ができてきたら、ワークシート【資料 61】に階名を書き込む。</p>	<p>◆（関）【行動観察】</p> <p>A：与えられた時間に十分活動して、伴奏に合うように、何度も音の響きを確認しながら、旋律づくりに取り組んでいる。</p> <p>B：和音から音を選び、音の響きを確認しながら旋律をつくっている。</p> <p>C：旋律づくりの活動が滞っている。</p>

問題解決のプロセス&学習活動	指導上の留意点等 ◆評価基準【評価方法】
<p>第4プロセス 解決方法の共有</p> <p>*タブレット PC の活用 (和音伴奏の再生機)</p> <p>●つくった旋律を音楽作成ソフトの和音伴奏を再生しながら楽器で演奏し、グループ内で聴き合う。互いに感想を交流する。</p> <p>【第8時】(後半は、【第9時】も含まれる)</p> <p>第1プロセス 問題の理解</p> <p>●前時のめあての振り返り</p> <div data-bbox="152 523 566 587" style="border: 1px solid black; padding: 2px;">和音にふくまれる音を使って4小節の旋律をつくろう。</div> <p>第2プロセス 問題の特徴づけと表現</p> <p>●めあて</p> <div data-bbox="152 735 573 772" style="border: 1px solid black; padding: 2px;">リズムを変えて、気に入った旋律に仕上げよう。</div> <p>●既習のリズムを振り返る。 (予想される子どもの意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リズム遊びのリズムが使える。 ・演奏しやすいリズムにしよう。 <p>第3プロセス 問題の解決</p> <p>●教科書 P27³のリズムの例を参考にして、前時につくった旋律のリズムを変え、リコーダーや鍵盤ハーモニカで演奏する。</p> <p>●つくった旋律のリズムを工夫して、気に入った旋律に仕上げる。(ワークシート【資料 6²】)</p> <p>*タブレット PC の活用 (和音伴奏の再生機・リズムづくりの補助的機能)</p> <p>第4プロセス 解決方法の共有</p> <p>*タブレット PC の活用 (和音伴奏の再生機)</p> <p>●グループ内で聴き合い、互いに感想を交流する。</p> <p>●オリジナルの気に入った旋律ができれば、五線譜に書く (ワークシート【資料 6³】)</p>	<p>●二分音符、全音符 (4小節目) のみでも旋律として成立するが、「少し物足りない」「これまで習ったリズムを使いたい」という子どもの思いが立ち現れるような導入を行う。</p> <p>●発展的な取扱いとして、和音の音に含まれていない隣接する経過音を用いてもよいことを伝える。</p> <p>◆ (創)【行動観察】</p> <p>A: 様々な要素について考慮しながら、旋律づくりに取り組んでいる。</p> <p>B: 一定の指示をふまえながら旋律づくりに取り組んでいる。</p> <p>C: 旋律づくりに工夫が見られない。</p> <p>◆ (技)【演奏聴取・行動観察】</p> <p>A: 音の並びやリズムを工夫し、自分なりのまとまりのある旋律をつくっている。聴き手を意識して、正確に演奏することができる。</p> <p>B: リズムを工夫し、自分なりのまとまりのある旋律をつくっている。聴き手を意識して、演奏することができる。</p> <p>C: リズムの工夫や旋律づくりが滞っている。聴き手を意識して、演奏することができない。</p>

問題解決のプロセス&学習活動	指導上の留意点等 ◆評価基準【評価方法】
<p>第5プロセス 問題の熟考と発展</p> <p>●ワークシートに振り返りを書く。 (予想される子どもの意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1小節目と3小節目を同じリズムをつかった。 ・4小節目は「ド」の音を使って「終わる感じ」で終わるようにした。 ・指の移動をできるだけ近くになるようにしました。 <p>【第10時】</p> <p>第1プロセス 問題の理解</p> <div data-bbox="1227 754 1686 818" style="border: 1px solid black; padding: 2px;">和音にふくまれる音を使って、「小学校生活の思い出ソング (8小節)」をつくろう。</div> <p>●めあて</p> <div data-bbox="1227 887 1686 919" style="border: 1px solid black; padding: 2px;">歌に入れたい言葉を出し合おう。</div> <p>第2プロセス 問題の特徴づけと表現</p> <p>●これまでの小学校生活の思い出を発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運動会 ・遠足 ・自然教室 ・修学旅行 ・クラスレクリエーション など <p>第3プロセス 問題の解決</p> <p>●小学校生活を振り返りながら、歌のテーマを考える。</p> <p>第4プロセス 解決方法の共有</p> <p>●3~4人で1グループとなり、それぞれの考えを出し合い、言葉を選んでいく。</p>	<p>◆ (創)【ワークシートの記述】</p> <p>A: 「音の高さ」「旋律の『続く感じ』『終わる感じ』『リズム』といった言葉を用いて、旋律づくりの工夫についての具体的な記述が多くある。</p> <p>B: 旋律づくりの工夫についての記述がある。</p> <p>C: 旋律づくりの工夫についての記述がない。</p> <p>●歌詞の量の目安として、『星の世界』教科書 22 ページの 8 小節を提示する。</p> <p>●この時間で、歌詞を書くグループも出てくると思われる。歌に入れたい言葉を選ぶだけでもよい。</p>

問題解決のプロセス&学習活動	指導上の留意点等 ◆評価基準【評価方法】
<p>【第11時】</p> <p>第1プロセス 問題の理解 第2プロセス 問題の特徴づけと表現</p> <p>和音にふくまれる音を使って、「小学校生活の思い出ソング（8小節）」をつくろう。</p> <p>●めあて</p> <p>和音にふくまれる音や、2分音符、全音符を使って歌いやすい旋律をつくろう。</p> <p>I→IV→(I→I)→V7 【1～4小節目】 I→IV→(I→V7)→I 【5～8小節目】 (和音伴奏は、教師が準備)</p> <p>(予想される子どもの意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4小節の旋律づくりの時と同じで、音を選ぼう。 ・歌いやすくするためには、音の高さが変わりすぎないほうがよいのかな。 <p>第3プロセス 問題の解決</p> <p>●2分音符、全音符でつくる。 一人で考えてつくる。</p> <p>*タブレットPCの活用（和音伴奏の再生機） (タブレットPCで和音伴奏を再生し、リコーダーで演奏しながら旋律をつくる。)</p> <p>●ワークシート【資料7】の「自分の考えた旋律」に階名を書く。</p> <p>第4プロセス 解決方法の共有</p> <p>●グループ内で交流する</p> <p>●グループで、歌いやすい旋律をつくる 「リコーダーで演奏する」 「階名で歌ってみる」</p> <p>*タブレットPCの活用（和音伴奏の再生機） (タブレットPCで和音伴奏を再生し、リコーダーで演奏しながら旋律をつくる。)</p> <p>●ワークシート【資料7】の「仲間と考えた旋律」に階名を書く。</p>	<p>・教科書課題での旋律づくりの方法が歌づくりにも応用できることに気づかせる。</p> <p>・歌づくりであるため、歌いやすい旋律になるように意識してつくらせる。</p> <p>・前回の課題でつくった旋律を参考にしてもよいことを伝える。</p> <p>◆（関）【演奏聴取・行動観察】</p> <p>A：与えられた時間に十分活動して、歌づくりに取り組んでいる。伴奏に合うように、何度も音の響きを確かめながら、歌づくりに積極的に取り組んでいる。</p> <p>B：音の響きを確かめながら歌づくりに取り組んでいる。</p> <p>C：歌づくりの活動が滞っている。</p>

問題解決のプロセス&学習活動	指導上の留意点等 ◆評価基準【評価方法】
<p>【第12時】（後半は、【第13時】も含まれる）</p> <p>第1プロセス 問題の理解 第2プロセス 問題の特徴づけと表現</p> <p>●めあて</p> <p>つくった旋律を歌詞に合うように、リズムを変えて歌をつくりましょう。</p> <p>第3プロセス 問題の解決 第4プロセス 解決方法の共有</p> <p>●歌に入りたい言葉や歌詞を参考にし、つくった旋律のリズムを変更しながら歌をつくる。【資料8】</p> <p>*タブレットPCの活用（和音伴奏の再生機・リズムづくりの補助的機能）</p> <p>●グループ（3～4名）で話し合いながら、歌いやすい歌になるようにする。</p> <p>(予想される子どもの意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この言葉には、どのリズムが合うかな。 ・歌いやすくするために、音の高さが動き過ぎないようにしよう。 <p>【第14時】</p> <p>第1プロセス 問題の理解 第2プロセス 問題の特徴づけと表現</p> <p>●めあて</p> <p>「小学校生活の思い出ソング（8小節）」を相手に伝えるように練習しよう。</p> <p>・考えた歌詞が伝わるように、口や喉を開けて、はっきりと発声する。</p> <p>・音程に気をつけて歌う。</p>	<p>・歌づくりであるため、歌いやすい旋律になるように意識してつくらせる。</p> <p>◆（創）【行動観察】</p> <p>A：グループ内で、「音の並びやリズム」「続く感じ」「終わる感じ」「言葉と旋律の関連」「歌いやすさ」などを意識しながら歌づくりをしている。歌づくりの工夫が十分できている。</p> <p>B：「音の高さ」「リズム」を変更して歌づくりをしようとしている。</p> <p>C：歌づくりの工夫ができていない。</p> <p>◆（技）【演奏聴取・行動観察】</p> <p>A：和音に含まれる音や既習のリズムを基に、「言葉と旋律の関係」など、歌詞を意識しながら、歌いやすい歌づくりをすることができる。</p> <p>B：「言葉とリズム」を意識して、歌づくりをすることができる。</p> <p>C：歌づくりの活動ができない。</p> <p>・歌に苦手意識が強い子どもは、メロディーを楽器で演奏してもよいこととする。</p>

問題解決のプロセス&学習活動	指導上の留意点等 ◆評価基準【評価方法】
<p>第3プロセス 問題の解決 第4プロセス 解決方法の共有</p> <p>●発表に向けて歌の練習をする。 *タブレット PC の活用 (和音伴奏の再生機)</p> <p>【第15時】 第1プロセス 問題の理解 第2プロセス 問題の特徴づけと表現</p> <p>●めあて</p> <p>「小学校生活の思い出ソング (8小節)」を相手に伝えるように歌おう。</p>	<p>◆ (技) 【演奏聴取・行動観察】</p> <p>A: 聴き手を意識して, 正確に演奏することができる。 B: 聴き手を意識して, 演奏することができる。 C: 聴き手を意識して, 演奏することができない。</p>
<p>・考えた歌詞が伝わるように, 口や喉を開けて, はっきりと発声する。 ・音程に気をつけて歌う。</p> <p>第3プロセス 問題の解決 第4プロセス 解決方法の共有</p> <p>●小学校生活の思い出ソング発表。 ・和音やその移り変わりを感じながら, 仲間と共に演奏する。 ・仲間の発表を聴きながら和音の流れは同じでもグループごとに旋律づくりには違いがあることを知り, 表現のよさやおもしろさを味わう。 *タブレット PC の活用 (和音伴奏の再生機)</p>	<p>◆ (技) 【演奏聴取・行動観察】</p> <p>A: 聴き手を意識して, 正確に演奏することができる。 B: 聴き手を意識して, 演奏することができる。 C: 聴き手を意識して, 演奏することができない。</p>
<p>第5プロセス 問題の熟考と発展</p> <p>●ワークシートに振り返りを書く。 (予想される子どもの意見)</p> <p>・歌詞の言葉の数と, リズムの組み合わせを考えて, 歌いにくくならないようにした。 ・歌いやすくなるように, 速いリズムのところは, 近い音になるようにした。</p>	<p>◆ (創) 【ワークシートの記述】</p> <p>A: 「歌いやすさ」「言葉と旋律の関連」 「1小節に入れる文字数」など, 歌づくりの際に工夫したことについての具体的な記述がある。 B: 歌づくりの際に, 工夫したことについての記述がある。 C: 歌づくりの際に, 工夫したことについての記述がない。</p>

リズムをつくってアンサンブル

① 下の音符や休符のカードを使って、 $\frac{4}{4}$ 拍子で
1 小節のリズムをつくりましょう。

② 自分の作ったリズムを書いてみましょう。

6年()組 ()番

名前 _____

今日のふりかえり (月 日)

今日のふりかえり (月 日)

① 和音にふくまれる音を使って4小節の^{せんりつ}旋律をつくらう

6年()組 ()番

名前【作曲者名】

1 選んだ音を下の○に階名で書きましょう。

3 オリジナルの気に入った^{せんりつ}旋律ができたなら、五線に書きましょう。

教育芸術社の「平成 27 年度小学生の音楽 6 (教育芸術社)」26 ページに掲載されている「和音伴奏譜」「和音伴奏を階名にしたもの」を提示。

かいめい 階名 $\frac{4}{4}$

かいめい 階名 $\frac{4}{4}$

A

B

2 2分音符 のリズムを変えて、オリジナルの^{せんりつ}旋律をつくりましょう。

1 2 3 4

A $\frac{4}{4}$

かいめい 階名 $\frac{4}{4}$

B $\frac{4}{4}$

かいめい 階名 $\frac{4}{4}$

ふりかえり (つくる時に工夫をしたことを書きましょう)

②和音にふくまれる音を使って、「小学校生活の思い出ソング(8小節)」をつくらう

()組 ()番 ()グループ

【めあて】
和音にふくまれる音や、2分音符、全音符を使って、歌いやすい^{せんりつ}旋律をつくりましょう

作詞・作曲者名 _____

教育芸術社の「平成 27 年度小学生の音楽 6 (教育芸術社)」
26 ページに掲載されている「和音伴奏譜」「和音伴奏を階名にしたもの」を提示。

・冒頭の 4 小節の和音伴奏譜は、筆者が作成。
・教育芸術社の「平成 27 年度小学生の音楽 6 (教育芸術社)」
26 ページに掲載されている「和音伴奏を階名にしたもの」を参考に
して提示。

① 自分の考えた旋律

② 仲間と考えた旋律

自分の考えた旋律

仲間と考えた旋律

③ 和音にふくまれる音を使って、「小学校生活の思い出ソング(8小節)」をつくらう

リズム								
か い め い 階 名								
か し 歌 詞								

・冒頭の4小節の和音伴奏譜は、筆者が作成。
 ・5小節目より、教育芸術社の「平成27年度小学生の音楽6(教育芸術社)」
 26ページに掲載されている「和音伴奏譜」を提示。

リズム								
か い め い 階 名								
か し 歌 詞								

()組 ()番 ()グループ

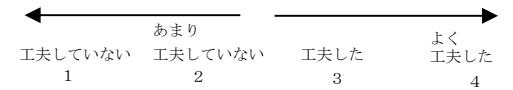
作詞・作曲者名

【めあて】

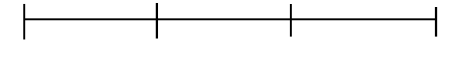
つくった^{せんりつ}旋律を歌詞に合うように、リズムを変えて、歌をつくりましょう。

ふりかえり

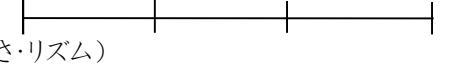
(歌づくりをする中で、工夫したことについて聞きます。そうだと思う番号に、○をふりましょう。)



① 歌詞について



② 言葉とリズムの組み合わせ



歌いやすさについて(音の高さ・リズム)

(歌づくりで工夫したところを書きましょう)

**小学校音楽科の表現領域「音楽づくり」が活性化する指導に関する研究
ータブレットPCを補助的に活用しながらー**

〔研究協力員〕 四日市市立楠小学校 講 師 小林 千恵

〔執 筆 者〕 四日市市教育委員会 研 修 員 謝名堂正之

〔指導・助言〕 国立教育政策研究所 総括研究官 山森 光陽

研究調査報告 第404集

**小学校音楽科の表現領域「音楽づくり」が活性化する指導に関する研究
ータブレットPCを補助的に活用しながらー**

発 行 平成30年 3月 9日

発行所 四日市市教育委員会教育支援課

四日市市諏訪町2番2号

電話 (059) 354-8149

FAX (059) 359-0280
